東北地方太平洋沿岸のウミガメの民俗

―東日本大震災後の追跡調査を踏まえて―

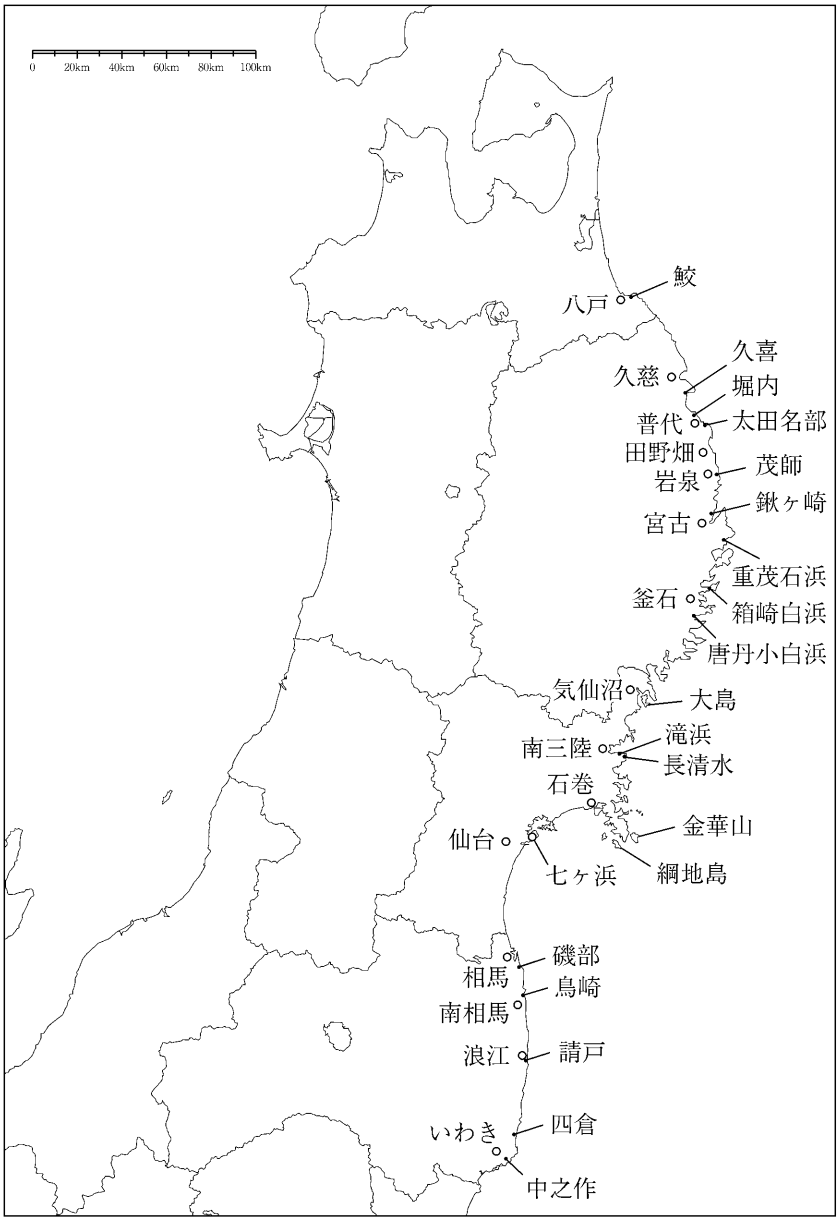
藤井弘章

はじめに

東北地方の太平洋沿岸（福島県、宮城県、岩手県、青森県の下北半島）には、ウミガメにまつわる伝承や習俗が広く分布している。網にかかったウミガメに酒を飲ませて放す、死んでいるウミガメを埋葬して祭祀・供養する、ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げて祀る、などである。

この地方のウミガメの民俗については、昭和一三年（一九三八）に柳田国男主導で実施された海村調査の際、岩手県普代村を訪れた桜田勝徳によって、ウミガメを放流する習俗が報告されている。ただし、海村調査の報告書である「採集手帖」記載の事例は活字化されていないものも多く、桜田勝徳による普代村のウミガメ事例も、桜田の「採集手帖」以外では確認できない〔藤井　二〇〇二〕[1]。

また、昭和二六年（一九五一）、柳田国男の喜寿を祝う『民間伝承』の特集号に、宮城県のウミガメに関する習俗が報告されている〔丹野　一九五一〕。その後も、地元の研究者を中心にウミガメに関する習俗がしばしば報告されることがあった〔沢内　一九五五、釜石市誌編纂委員会　一九六一、七ヶ浜町誌編纂委員会　一九六七、唐桑町史編纂委員会編　一九六八、小島俊一　一九七四・一九八四・一九九二、和田　一九七八、小玉　一九八〇、早坂　一九八一、釜石市教育委員会社会教育課文化係　一九八二、大島郷土誌刊行委員会編　一九八二、宮古市教育


0
20km
40km
60km
80km
100km
鮫
八戸
久喜
久慈
堀内
普代
太田名部
田野畑
茂師
岩泉
鍬ヶ崎
宮古
重茂石浜
釜石
箱崎白浜
唐丹小白浜
気仙沼
大島
滝浜
南三陸
長清水
石巻
金華山
仙台
七ヶ浜
綱地島
磯部
相馬
鳥崎
南相馬
浪江
請戸
四倉
いわき
中之作

地図

委員会　一九八四、東北歴史資料館　一九八四、八戸市博物館　一九八八、志津川町誌編さん室　一九八九・一九九一、阿部　一九九〇、鹿島町史編纂委員会　一九八八、三浦　一九九八、柳沢　二〇〇一、牡鹿町誌編さん委員会　二〇〇二、南相馬市博物館　二〇〇六、八戸市史編纂委員会　二〇〇八〕。ただし、そうした事例についてとくに考察されることはなかった。(2)

そのなかで、成城大学が主催した海村・離島の追跡調査に参加した筆者は、桜田勝徳の「採集手帖」をもとに、岩手県沿岸のウミガメ事例を広く追跡調査し、三陸一帯のウミガメの民俗を全国的な事例と比較した〔藤井　二〇〇一〕。さらに、宮城県気仙沼市を拠点に精力的な民俗調査をされていた川島秀一氏は、福島県から青森県にかけてのウミガメ事例を集めて考察を行った〔川島　二〇〇四・二〇〇五〕。川島氏の考察によって、東北地方のウミガメの民俗の全容と特徴が明らかになってきたといえる。その後も、筆者は東北一帯のウミガメ事例の調査を続け、宮城県七ヶ浜町の「亀霊神社」について考察を行ったが〔藤井　二〇一三a〕、東北地方全体の考察はいまだ行っていなかった。(3)

平成二三年（二〇一一）には東北太平洋岸を東日本大震災による大津波が襲い、沿岸部は甚大な被害をこうむった。この地方の民俗の現状確認と継続した追跡調査は、民俗学研究者にとって大変重要な仕事である。限定的ではあるが、筆者は平成二四年（二〇一二）にウミガメの民俗について追跡調査を行った。(4) 本稿は、震災後の追跡調査を踏まえて、東北地方太平洋沿岸のウミガメの民俗をあらためて考察するものである。(5)

一　東北地方太平洋沿岸におけるウミガメの生態と民俗知識

1　ウミガメの産卵

日本列島に上陸・産卵するウミガメは、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの三種である。このうち、アカ

表１　福島県沿岸で記録されたウミガメ

種名	性別	採集・上陸年月日	採集・上陸地点	採取方法	甲長(cm)	産卵・孵化・放流	出典
オサガメ		昭和初期	浪江町請戸浜	漂着			南相馬市博物館　2006
オサガメ	メス	1953年8月15日	塩屋埼200㎞				柳沢　2001
アカウミガメ？	メス	1978年8月8日	新舞子海岸	上陸		産卵・孵化	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	1979年8月2日	新舞子海岸？	上陸		産卵	柳沢　2001
オサガメ	不明	1985年8月31日	勿来海岸	漂着	体長約2m		柳沢　2001
アカウミガメ？	メス	1986年7月13日	勿来海岸	上陸		産卵	柳沢　2001
アカウミガメ？	メス	1987年7月	勿来海岸	上陸		産卵・孵化	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	1999年4月19日	塩屋埼1㎞	底曳網	73.2	放流	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	1999年4月27日	茨城県大津沖30km	底曳網	76.3	放流	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	1999年6月23日	勿来沖9km	巻き網	71.5	放流	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	2000年8月6日	四倉海岸	上陸		産卵	柳沢　2001
アカウミガメ	不明	2000年8月16日	楢葉町井出川河口	漂着	77.4	埋葬	柳沢　2001
アオウミガメ	メス	2000年10月1日	久ノ浜海沖	サケ刺し網	43.4	放流	柳沢　2001
アカウミガメ	メス	2001年6月末	勿来海岸			産卵・孵化	福島県生活環境部環境政策室自然保護グループ　2003
アカウミガメ		2003年9月23日	南相馬市原町区下渋佐	漂着			稲葉氏のご教示
アカウミガメ		2005年2月4日	相馬市長洲	漂着			稲葉氏のご教示
アカウミガメ		2005年12月25日	南相馬市烏崎海岸	漂着			稲葉氏のご教示

ウミガメの産卵地が最も広く、太平洋岸では福島県南部が産卵地の北限といわれてきた。福島県南部海域では、アクアマリンふくしまの柳沢践夫氏がウミガメの上陸、産卵、混獲などの情報を集めていた〔柳沢　二〇〇〇・二〇〇一〕。柳沢氏がまとめた一覧表に、南相馬市博物館の稲葉修氏提供の追加データを加えたものが表一である。福島県において、アカウミガメの産卵が確認されているのは、いわき市勿来海岸、永崎海岸、四倉海岸であるとい

うデータもあるため〔福島県生活環境部環境政策室自然保護グループ　二〇〇三〕、永崎でも産卵が確認されているようである。記録に残っているデータは限られているが、いわき市では昭和初期にもウミガメが卵を産むことは知られていた。いわき市中之作の松本茂氏（大正一三年生まれ）は、子どものころには、永崎でも卵を産んだことがあったと語る。掘ってみたら卵があったが食べなかったという。産卵頭数が限られていたためか、産卵に関する民俗知識は確認できなかった。

福島県いわき市がアカウミガメ産卵地の北限といわれてきたが、宮城県でも山元町〔亀崎　二〇一二〕、名取市閖上の砂浜〔秋葉ほか　二〇〇〇〕でも産卵したことがあるという。筆者の調査では、宮城県での産卵は確認できなかった。

▲写真１　四倉海岸（2012 年 11 月撮影）

岩手県、青森県ではまったく産卵は確認されていない。筆者の聞き取りでは、岩手県宮古市、普代村の漁民は、「カメがオカへ上がったというのは聞いたことがない。」と語っていた。

２　ウミガメの回遊

日本列島近海には、列島で産卵するアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイに加えて、列島で産卵しないヒメウミガメ、オサガメも回遊している。東北では産卵がみられる南部だけでなく、北部のほうまでさまざまなウミガメが回遊している。表１からは、上陸・産卵をするアカウミガメだけでなく、アオウミガメやオサガメの回遊も確認できる。古い記録としては、昭和初期に浪江町請戸浜にオサガメが上がっている〔南相馬市博物館

二〇〇六〕。これについては七章で紹介する。

宮城県では山元町牛橋の浜にアカウミガメが漂着した記録がある〔秋葉ほか　二〇〇〇〕。オサガメは仙台市宮城野区蒲生で二回、鳴瀬町（現在、東松島市）端島では昭和一〇年（一九三五）に捕獲の記録がある〔秋葉ほか　二〇〇〇〕。

漂着や混獲の記録は限られているが、宮城県の漁民はウミガメの回遊を目撃していることが多いようである。筆者が漁民からの聞いたところによると、ウミガメは夏場に来ることが多いという。江戸時代にウミガメ祭祀を行った家の子孫である鈴木捨五郎氏（昭和一二年生まれ）は、「カメはあったけー（暖かい）水に乗ってくる」という。具体的には六月から一〇月ごろであるという。ウミガメが回遊してくると、七ヶ浜町でも漁業の網にかかることがある。石巻市鮎川の山本春人氏（大正一一年生まれ）は次のように語る。

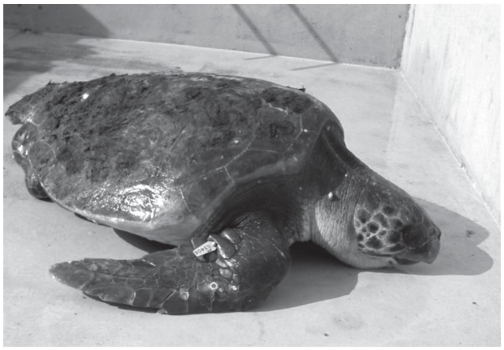
▲写真２　アカウミガメの漂着死体（2010年5月18日、福島県南相馬市原町区北泉海岸）（南相馬市博物館提供）

このあたりでは、七月末から黒潮が流れる。五月、六月あたりはまだ寒流が強い。七月末から年末まで黒潮が流れる。黒潮が流れると、カメが自然にかかる。寒流ではカメは入らない。

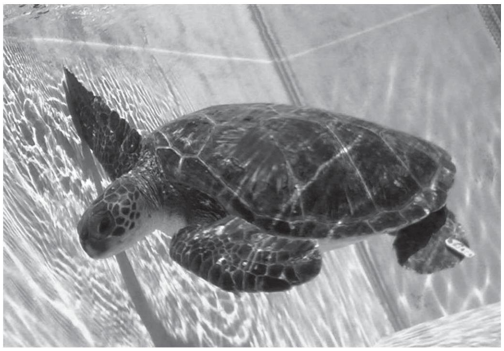
産卵地より遠く離れている岩手県以北ではさらに、ウミガメに関するデータは乏しかった。そのため、平成一七年（二〇〇五）七月から、東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター（岩手県大槌町）を拠点にしたウミガメ調査プロジェクトが開始された。まず、ウミガメ類の来遊状況の把握を目的にして、定置網による混獲状況の調査が実施された。その結果、六月から一〇月にかけて亜成体から成体サイズのアカウミガメが、七月から一〇月

にかけて亜成体サイズのアオウミガメが定期的に来遊することが明らかになり、三陸沿岸域がアカウミガメおよびアオウミガメにとって、夏季限定の摂餌場であることがわかってきた〔楢崎　二〇〇九、楢崎ほか　二〇一一〕。平成二三年（二〇一一）三月の大津波により調査地の大槌町が甚大な被害を受けたため、調査は中止していたが再開されつつある。

筆者が漁民から聞いたところによると、岩手県の漁民もウミガメの回遊は認識していた。宮古市赤前出身の堀内良司氏（大正九年生まれ）は、三陸に回遊するカメは暖流のピーク時の八月ごろに来るという。田野畑村の久里十太郎氏（大正一五年生まれ）は、次のように語る。



▲写真３　岩手県山田町の定置網で混獲されたアカウミガメ（楢崎友子氏撮影）



▲写真４　岩手県大槌町の定置網で混獲されたアオウミガメ（楢崎友子氏撮影）

カメは黒潮の本流がこないと網に入らない。死んでいるカメを見たことはない。

青森県八戸市鮫で、筆者が聞き取りをしたところでは、黒潮は岩手県沖で親潮とぶつかるため八戸沖は親潮が強く、ウミガメは来たことがないという。

二　捕獲・利用習俗

東北地方でも、縄文時代に

表２　東北地方太平洋岸におけるウミガメ類出土一覧

遺跡名	所在地	時代	種
薄磯・貝塚	福島県いわき市平豊間町薄磯字古塚	縄文前期	アオウミガメ、アカウミガメ、ウミガメ、ウミガメ類
大畑・貝塚	福島県いわき市泉町下川字大畑	縄文草創期；縄文早期	ウミガメ類、オサガメ
綱取・貝塚	福島県いわき市小名浜下神白字綱取・大作・小三崎	縄文後期	ウミガメ類
寺脇・貝塚	福島県いわき市小名浜古港字寺脇		ウミガメ
真石・貝塚	福島県いわき市南富岡字真石	縄文前期	ウミガメ
南富岡	福島県いわき市	縄文中期；縄文後期	ウミガメ
二月田・貝塚（空墓・貝塚）	宮城県宮城郡七ケ浜町吉田浜二月田	縄文草創期；縄文早期；弥生；平安	ウミガメ類
仁斗田・貝塚	宮城県石巻市田代浜内山	縄文草創期；縄文中期；縄文後期	ウミガメ
沼津・貝塚（出外・貝塚）	宮城県石巻市沼津字出外	縄文草創期；縄文早期；縄文中期；縄文後期；弥	ウミガメ
南境・貝塚（北境久保・遺跡）	宮城県石巻市南境妙見，桃生郡河北町北境久保	縄文草創期；縄文早期；縄文前期；縄文後期	ウミガメ類
桂島・貝塚（桂島台囲・貝塚）	宮城県塩釜市浦戸桂島台囲	縄文草創期；縄文中期；縄文後期	ウミガメ
田柄・貝塚	宮城県気仙沼市所沢	縄文草創期；縄文早期；縄文前期；縄文中期；縄	ウミガメ類
南最知・貝塚	宮城県気仙沼市最知南最知	縄文草創期；縄文中期；縄文後期；古墳後期	ウミガメ
西ノ浜・貝塚（磯崎・貝塚）	宮城県宮城郡松島町磯崎字西ノ浜	縄文草創期；縄文早期；縄文	ウミガメ
大木囲・貝塚	宮城県宮城郡七ケ浜町大字東宮浜東大木	縄文草創期；縄文中期；縄文	ウミガメ類
平田原・貝塚	宮城県桃生郡矢本町大塩平田原	縄文前期；縄文中期；縄文後期；奈良；平安	ウミガメ類
宮戸島里（浜）	宮城県東松島市	縄文早期；縄文前期；縄文中期；縄文後期	ウミガメ類
出島・貝塚	宮城県牡鹿郡女川町出島寺間・山下	縄文草創期；縄文早期；縄文	オオウミガメ（ママ）
前浜・貝塚	宮城県本吉郡本吉町前浜 326 番地の 2	縄文草創期；縄文早期	ウミガメ
長者屋敷・貝塚	宮城県本吉郡歌津町管の浜	縄文草創期；縄文早期；縄文後期	ウミガメ
中沢浜・貝塚	岩手県陸前高田市広田町字中沢浜	縄文早期；縄文中期；縄文後期	ウミガメ類
貝鳥・貝塚	岩手県西磐井郡花泉町油島蝦島貝鳥	縄文草創期；縄文早期；縄文後期	ウミガメ類
宮野・貝塚	岩手県気仙郡三陸町綾里宮野	縄文草創期；縄文中期；縄文後期	ウミガメ
崎山弁天・遺跡	岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里崎山	縄文草創期；縄文後期	ウミガメ類
札地・貝塚	青森県下北郡東通村尻屋札地	縄文前期	ウミガメ類

は、ウミガメを捕獲して利用することがしばしばあったようである。貝塚遺跡のデータベースで検索すると、福島県で六か所、宮城県で一四か所、岩手県で四か所、青森県で一か所の遺跡からウミガメが出土している。[6] 今回は考古学的な考察ではないため、詳細を調べていないが、おそらくほとんどが食料残滓であると思われる。このなかで、福島県いわき市の寺脇遺跡から出土したウミガメの側板骨には刺突傷痕があると報告されていることから、縄文時代には東北地方でもウミガメを銛で突き捕ることがあったことが推測される〔馬目　一九六九〕。また、特徴的なものとして、岩手県一関市花泉町の貝鳥貝塚から出土したウミガメ遺体がある。これは、甲羅を穿孔品として利用した例である〔花泉町教育委員会　一九七一〕。

ウミガメの回遊や産卵が限られる地域であるために、その後も南西日本のように広く捕獲・利用が行われることはなかったと思われる。ただし、江戸時代や昭和時代になっても、ごくまれに利用することはみられた。江戸時代には、宮城県石巻市の網地島でウミガメを膏薬にしようとした例がある。享保一四年（一七二九）に建立された「宝亀塔」の碑文に「夫欲成膏」という表現がみられる。捕獲したウミガメから膏薬を採ろうとしたということであるが、結局は採取せずに「霊亀塔」を建立して祀ったというものである。

岩手県釜石市唐丹の盛岩寺には、文政一二年（一八二九）にウミガメを埋葬して、その経緯を刻んだ石碑が立っている。漁師の網にかかったウミガメを寺の池においていたが、商いとしてウミガメを殺す者が出ることを住職は心配していた。この場合も、ウミガメは利用されることはなく、埋葬して石碑が建立されているのであるが、この碑文からは、ウミガメを利用する習俗もあったことがうかがえる。

昭和時代になっても、食用にされることがあった。宮城県山元町では、次のような事例が報告されている〔川島二〇〇四〕。

大ガメが半死の状態で上がったために、酒を飲ませたが、カメをこのままにして腐らせたら祟るかもしれない

と思って、漁師だけで「供養」のためにカメを食べた。（筆者要約）

川島氏のいうように、これはきわめてまれな事例であると思われるが、昭和時代にもウミガメを食用にする人もいたようである。筆者の平成一七年（二〇〇五）の調査では、宮城県石巻市の網地島でも、明治生まれの人がカメを捕ってきて食べたことがあると聞いた。ただし、この人以外は食べたという人はいないという。

また、筆者の聞き取りでは、昭和二〇年ごろまでは、岩手県でも突棒船がウミガメを捕獲して食用にすることがあったことも分かった。ところが、周辺住民は「とんでもないことをする」、「祟りがある」と語っていたといい、その後に不幸があったとき、ウミガメのことが話題に出たという。岩手県でも宮古の人が土佐のマグロ船に乗りに行ったり、土佐の人が気仙沼辺りの船に乗りに来たので、土佐の人がカメをごちそうだといって喜ぶのは知っている。それでも、ウミガメを捕獲して食べようとすることはほとんどなく、ごくまれに捕えて食べることもあったという程度のようである。

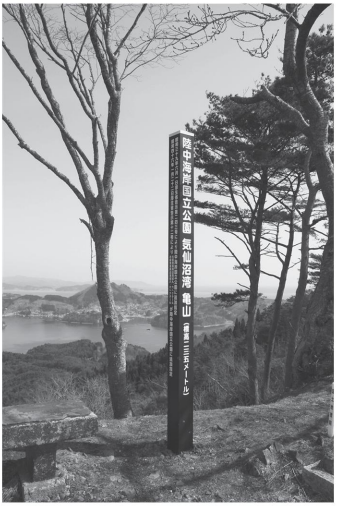
▲写真５　下仁井田諏訪神社（2012年11月撮影）

三　伝説・縁起

福島県いわき市には浦島伝説が伝わっている。いわき市四倉の下仁井田は浦島太郎の誕生地といわれ、下仁田の諏訪神社は浦島の屋敷跡という。

いわき市の浦島伝説は以下のような内容である〔福島中央テレビ一九七六〕。

浦人がカメを捕らえたところに浦島太郎が通りかかる。金を与えて



▲写真６　亀山（2012年３月撮影）

酒を求めて、捕らえた人やカメに酒を飲ませてカメを放した。その後、浦島が釣りをするために小船で沖へ出ると、乙姫がカメに乗って迎えに来た。浦島は竜宮へ行き、助けられた恩人として丁重なもてなしをうける。浦島は故郷が恋しくなってカメに乗って帰る。故郷はすっかり変わっていたため、開けてはいけないといってもらった玉手箱を開けると、みるみるうちに老いはてた。（筆者要約）

この伝説は、アクアマリンふくしまの学芸員であった柳沢践夫氏も北限の浦島伝説として注目しており、たびたび紹介している〔柳沢　二〇〇一、里見　二〇〇七〕。

柳沢氏も指摘しているとおり、ここの浦島がカメを買い取ったのは大人であった。カメを捕らえた人にも酒を飲ませている点が興味深い。

福島県以北に浦島伝説は確認できないが、ウミガメに関する伝説はいくつかみられる。宮城県石巻市の金華山には「亀石」の伝説がある。これは、昔、金華山が女人禁制だったころ、女性が渡ってきてカメになってしまったというものである。現在は新しい防波堤を作って見えなくなっている。この伝説は、金華山黄金山神社で教えていただいた。

宮城県気仙沼市の大島には、薬師をカメが背負ってきたという言い伝えがある。そのカメが死んだために山頂に埋めた。それから、この山を「亀の森」、「亀山」と呼ぶようになったという。この話は宝暦一〇年（一七六〇）にまとめられた「奥州里諺集　巻一」に出ている〔菅原ほか　二〇〇一〕。

四　放流習俗

東北地方では、ウミガメが網にかかると酒を飲ませて放すという習俗が広く分布している。この習俗がいつごろから東北に広まってきたのかは不明であるが、江戸時代後期には確認できる。

1　福島県

福島県では、カメが網にかかったり、上がってきたりしていると、決して殺したりはせず、酒を飲ませて海に戻してやる〔和田　一九七八〕。いわき市四倉では、カメを見ると酒を飲ませて海に放してやるという〔和田　一九七八〕。三章で取り上げたように、いわき市の浦島太郎は、カメを捕らえた人とカメに酒を飲ませてから、カメを海に放していた〔福島中央テレビ　一九七六〕。

▲写真７　いわき市中之作（2012 年 11 月撮影）

いわき市中之作の松本茂氏（大正一三年生まれ）からは、次のような話を聞いた。

大きなカメが網に入ると大事にする。生きているカメは酒を飲ませて、「大漁させてけろよー」、「今度は人につかまんでないよー」などといって放す。

少し珍しい事例であるが、いわき市江名では、カメを見ると、柄杓で真水をあげた、という報告もある〔川島　二〇〇四〕。

2　宮城県

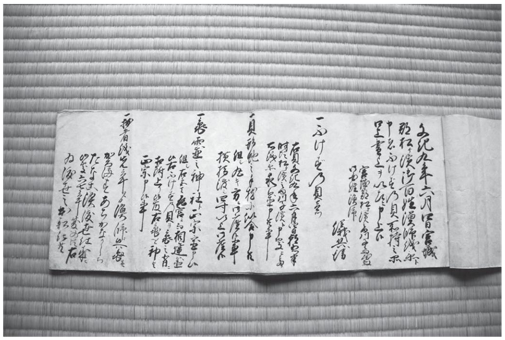
a　七ヶ浜町の事例―江戸時代と昭和時代―

七ヶ浜町に伝わる「亀霊神社」の由来には、文化七年（一八一〇）の夏、沖合いに出現したウミガメに酒を飲ませて放したことが記されている。その後、ウミガメを祀ることになるために、その経緯が詳しく残っている。この経緯は別に論じたが、酒を飲ませて放す部分だけ引用しておく〔藤井　二〇一三a〕。

亀与申物者酒ヲ呑候物之由、老人之咄ニ而承伝置候間、右亀ヲ捕置酒を為呑可申よし相談を仕候処、幸漁師共呑酒ニ持参仕候漁師之酒舟中ニ在合候間、為呑可申与右亀を捕、拙者共呑酒之内壱升斗り為呑候所、右酒ヲ一宇呑申候処、扨々亀ハ酒を呑事偽ニ無御座候（「亀霊神社不死貝由来」）

これによると、カメには酒を飲ませるとよいということが、江戸時代後期には、宮城県の漁民にも認識されていたことが分かる。わざわざ海中のウミガメを捕えて、酒を飲ませて放しているところが特徴的である。放す際には、今後、このカメを見ることがあるかもしれないとい

▲写真８　七ヶ浜町松ヶ浜（2005 年８月撮影）



▲写真９　「亀霊神社不死貝由来」（2006 年７月撮影）

うことで、「見印」をつけている。酒を飲ませて放す理由については、「亀は漁事ニは吉事之物御座候」（「亀霊神社不死貝由来」）という言葉もみられる。漁に恵まれるように、ウミガメに酒を振る舞って放している。

ウミガメに酒を飲ませて放す習俗は、昭和時代になっても確認できる。七ヶ浜町松ヶ浜と花淵浜の漁民からの聞き取りで、カメを海の神様の使いとして、網にかかっても酒を飲ませて放すという事例が報告されている（小玉一九八〇）。筆者の平成一七、一八年（二〇〇五、二〇〇六）の聞き取り調査でも同様の事例を確認できた。「亀霊神社」を祀った漁民の子孫である鈴木捨五郎氏は、ウミガメが刺し網や流し網に入ると酒を飲ませて帰した。捨五郎氏は、カメが本当に酒が好きなのかは分からないと考えているが、カメに木をかませて一升瓶で飲ませた。放すときには「網さかかってはだめだ」と声をかけた。カメが網に入るのは年に一回あるかないかという程度であるが、最近ではカメをオカまで持ってきて酒を飲ませることはなくなったという。

「亀霊神社不死貝由来」を所有する加藤実氏（昭和一一年生まれ）も、カメはひと夏に一、二回ぐらい網にかかるという。加藤氏の家では、明治時代の中ごろまでは漁船を所有して漁業を行っていたが、実氏の代には農業と旅館経営をしていた。子どものころ（昭和一七、八年ごろ）、大網という網があり、その網にカメノコが入ったことを実氏は記憶している。この辺りでは、子どものカメでなくても「カメノコ」が入ったという。このときも、カメを連れて来て、酒を飲ませてから海へ放した。カメが泳いでいくときに顔を出したため、見ていた人たちは、カメがお礼を言っているといっていたという。カメノコは長寿の縁起物であるといわれている。

また、東宮浜の鈴木義信氏（昭和二三年生まれ）も、子供のころ、父親の網にアカウミガメとオサガメが入ったことを記憶している。アカウミガメは松島の水族館に売ったという。その一、二年後、オサガメが網に入った。いずれも小型底曳網であった。同じような漁業をしている人たちは、よくカメがかかっていたという。カメは外洋のほうでよくかかっていた。オサガメは船に積んできて、四、五人で引き上げた。酒を買って来て、竹か棒で口を開

けて飲ませたところ、目から涙を流していたという。酒を飲ませたあと、松島湾内まで船で載せて行き、海へどぼんと落としたという。義信氏は、放したオサガメは「三分ぐらいたつと、ばぶーっと出て、その後、すーっと潜って行った。」と語る。

b　その他の地域

宮城県では、七ヶ浜町以外にも、ウミガメを放流する習俗が報告されている。『宮城県史』では、漁村民俗の俚諺として、カメに酒を飲ませて海に放すと大漁、と報告されている〔宮城県史編纂委員会　一九六〇〕。ただし、県内のどの地域の伝承であるのかは不明である。

▲写真 10　石巻市鮎川（2005 年 8 月撮影）

筆者の平成一七年（二〇〇五）の調査では石巻市においてウミガメ放流の事例を聞いた。石巻市鮎川の山本春人氏（大正一一年生まれ）は次のように語る。

カメはめったに捕れないが、大謀網に入る。オカへ持ってきて、酒を一升瓶で飲ませ、放してやる。「大漁させろよー」と言って放す。「どうぞお帰りください」ということもある。子どももよってたかって見に来る。カメが入るといいことがある。カメは吉兆の神様、大漁の神様。網に魚がいっぱい入るようにということ。

同じく石巻市に属する網地島の長渡浜では、阿部昭一氏（昭和一三年生まれ）より、以下のような話を聞いた。

カメが大網に入るとそのまま持ってくる。畳一畳ぐらいのカメを捕っ

てきて、酒を買ってきて酒を一升飲ませ「大漁させろよ」と言って放したことがある。五〇年以上前であった。みんなで頭をなでて沖向けて放した。砂浜だから押してやった。カメも酔うのか、頭を下げて行った。

このほか、石巻市の田代島では次のような事例が報告されている〔川島　二〇〇四〕。

大網などにカメが入ったときには、浜に連れて来て、一人の者がカメに向って「大漁させろよ」と語ると、別の者がカメに成り代わって「捕らせっから、捕らせっから」と返事をしてからカメを放した。（筆者要約）

気仙沼市大島では、カメに酒を飲ませて逃がすと大漁になる、という〔大島郷土誌刊行委員会　一九八二〕。気仙沼市唐桑町では、カメは竜宮のお使いとされているため、カメを捕まえると吉相として酒を飲ませて放す、という〔唐桑町史編纂委員会　一九六八〕。

このほか、気仙沼地方では、川島氏が複数の事例を報告している。気仙沼市小鯖では、カメを捕ってしまった場合は、口におにぎりを詰めて、お神酒を飲ませてから放した〔川島　二〇〇四、二〇〇五〕。気仙沼市神の倉では、カメを発見したとき、カシキが真水を三回カメにかけながら、「カメさん、大漁させてくれよ」と唱えた〔川島　二〇〇四、二〇〇五〕。気仙沼市小々汐では、カメを捕まえてしまったら、頭に赤い手ぬぐいをしめさせ、酒を飲ませて海に放した〔川島　二〇〇五〕。気仙沼地方のカツオ船では、カメを見つけると、わざわざデッキに上げて、船頭がオフナダマに供えられている一升瓶を持ってきてカメに酒をかけ、カシキが生米をカメの口に入れてから、「大漁させてけろ」と言って海に放した〔川島　二〇〇五〕。また、地域名は書かれていないものの、三陸沿岸では、捕獲したウミガメの背中に「祝大漁満足」という文字をペンキや紅妙丹（紅色の錆止めの薬品）で描いてから放すということも報告されている〔川島　二〇〇五〕。

3　岩手県

a　普代村の事例―昭和初期の海村調査と追跡調査―

昭和一二年（一九三七）から柳田国男主導でおこなわれた「海村調査」では、岩手県でも、重茂村（現宮古市）、普代村、宇部村（現久慈市）などで調査が行われている。このうち、普代村の「採集手帖」にはウミガメに関する次のような記述がみられる。

大田名部の大謀網で亀があがつたといふて酒をのませて放してやつた。大漁の兆しだといふて噂をしてゐた。これは、桜田勝徳が昭和一三年（一九三八）一〇月に調査したときの記録である。「豊漁不漁や幸不幸のお知らせといふことはありませんか」という項目に記録されている。ただし、この事例は桜田自身の著作に紹介されることもなく、昭和二四年（一九四九）に海村調査の成果をまとめた『海村生活の研究』で取り上げられることもなかった〔柳田　一九四九〕。

筆者は平成一一年（一九九九）五月に普代村で海村調査の追跡調査を行い、桜田の報

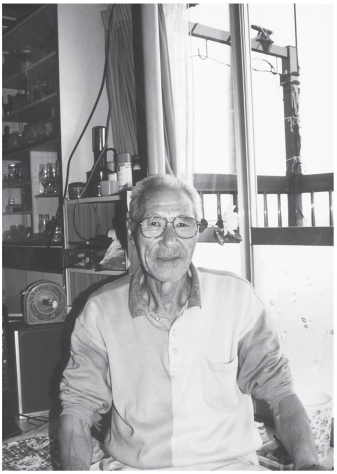
▲写真 11　普代村太田名部の港（2012 年 8 月撮影）

▲写真 12　普代村堀内の集落と港（1999 年 5 月撮影）

告を意識して、ウミガメに関する聞き取りを普代村において集中的に行った。成果の一部を発表しただけであったので〔藤井　二〇〇一〕、この機会に聞き取り内容を紹介しておきたい。

普代村堀内の金名部直徳（昭和九年生まれ）からは以下のような話をうかがった。

カメは酒を飲ませて返した。カメが網に入ると必ずオカまでもってくる。カメに飲ませるだけでなく、漁師の連中もお神酒を飲むので。網の責任者である大謀が気の利いた人であれば、鍛冶屋に頼んでステンレスの札を作ってもらい、そこに建網の名前や大謀の名前を刻んでカメにつけて放した。



▲写真 13　金名部直徳氏（1999 年 5 月撮影）

一五、六年前、二〇〇kgくらいのカメが定置網に入った。若い人たちはいたずらで、カメを安家川に軽トラックに積んでもっていって泳がせてみた。三、四日たって安家川の長老がカメを見つけて川から上げてお神酒を飲ませて、川にカメが入ってきたというのはすごく縁起のいいことだといってどんちゃんさわぎをした。

普代村太田名部の大上泰久（昭和九年生まれ）からは以下のような話をうかがった。

カメには酒を飲ませて返した。長生きするなどといった。甲羅にはペンキで「大漁祈」と書いて放した。船名を書く人もいた。今はカメが入るのは何年かに一回だが、かつてはもう少し多かった。カメは大事にした。

同じく太田名部の太田卯之助氏（昭和二年生まれ）からは以下のような話をうかがった。

カメには酒を飲ませて返した。涙を流した。祝うものであった。

普代村黒崎の道合政喜氏（昭和一二年生まれ）は次のように語る。

カメは定置網に入ると、酒を飲ませて「魚大漁させてくれよー」などといって放す。

桜田、筆者ともに調査を行った太田名部は、漁業が中心の集落であり、堀内、黒崎は海岸部の段丘上に位置する集落で、半農半漁の生活を行ってきた。桜田調査時における太田名部では、一〇月にマグロ、サケ、スルメ、サバ、イワシを対象とする建網（大謀網）を行っていた。桜田が調査したのは一〇月であったため、太田名部の大謀網にウミガメが入って酒を飲ませていたという。太田名部、堀内、黒崎ともに、戦後も定置網は盛んで、おもにサケを対象としていた。筆者の聞き取りでは、戦後も定置網にウミガメが入ることがあり、酒を飲ませて放したということになる。

b　宮古市の事例―昭和初期の新聞記事と追跡調査―

『岩手日報』昭和四年八月一七日には、以下のような記事が掲載されている。

「風水八大龍王海幸授給　海上安全大漁成就」

宮古で五尺と三尺の大正覚坊捕獲

背中に書いて沖に流す

宮古町小笠原合名会社所有第八号漁運丸は十四日宮古沖合約五十マイルの沖合で鰹漁中大亀の浮いてゐるのを発見し之を捕獲して同日入港した

一つは甲羅の長さは約五尺首から尾までは約六尺もあらうと思はれるオサ亀でもう一つは之より少し小さく甲羅は長さ三尺種類も赤海亀俗に正覚坊と云ふ何れも近海には珍しい代物である

漁師は非常に縁起を尊ぶものである亀は目出度いもの竜宮の御使者であるとして出漁中に之に出ッくわすと大漁があると云ひ伝へられ決して殺す様な事をせず漁師や船頭は祝い酒を振り舞ひ亀にも呑まして沖へ持ち帰っ

て放す例になってゐる

会社では此の例にならってその日直ぐ祝い酒を振り舞った、亀も二升樽をひっくり返してのどをならしてゐた、甲羅には捕獲した日と場所船会社名をしるし『風水八大龍王海幸授給』『海上安全大漁成就』と白書きして宮古沖約二マイル付近に放したが放たれた亀はいそいそと沖合はるかにおよぎ去った

(写真は甲羅に白書きせる大亀)

『風水八大龍王海幸授給』
海上安全大漁成就」
宮古で五尺と三尺の大正鼈坊捕獲
背中に書いて沖に放す

『岩手日報』昭和4年8月17日付

ここには、写真も掲載されている。数十年後に回想しながらの聞き取り調査ではなく、当時の資料であり、克明に様子が記録されているという意味で貴重である。まず、沖合五〇マイルの海上でカツオ漁をしていたとき、オサガメとアカウミガメが浮いていたことが分かる。これを捕獲して持ち帰り、酒を飲ませて放している。さらに、放すにあたっては、甲羅に捕獲日、捕獲場所、船会社名、神の名前、祈願内容を書いている。単に酒を飲ませて放すのではなく、大がかりな儀礼になっており、海上安全と大漁成就を祈願して行っていることがうかがえる。

この新聞記事に登場する宮古町は、現在の宮古市の中心部で、現在も三陸北部の中心的な町である。大正一三年(一九二四)に、隣接する鍬ヶ崎町と合併している。旧宮古町は、直接漁船を操業して漁業を行う漁民は少なく、有力な商人による漁船経営が盛んな地域であった。明治から昭和初期にかけては、カツオ漁、イワシ巻き網漁、沿岸マグロ延縄漁、イカ釣り漁などが盛んであった〔宮古市教育委員会　一九九四〕。『岩手日報』に掲載されている

出来事は、相当大がかりな儀礼になっている。これは、零細な漁業ではなく、旧宮古町の商人が経営していた大規模な漁業会社が関与していたからであると思われる。

しかし、昭和四年の出来事は特別なことではなかったようである。旧宮古町に隣接する旧鍬ヶ崎町でも、同じような習俗が報告されているのである〔沢内　一九五五〕。以下に内容を紹介しておく。

鍬ヶ崎では、海上でカメを見つけると、宝物にあったといって喜んで、「真水をあげろ」といって飲ませるという。カメは海の神の使者で、長命の象徴として珍重された。船人は、沖でカメに出会ったり、建網に入ると、カメを捕らえて帰り、船主の家で船子一同とともに縁喜を祝い、カメにも酒を飲ませる。その後、海に放すが、その際に、カメの背中に船名と大漁の文字を刻むこともある。（筆者要約）

筆者は平成一一年（一九九九）に、鍬ヶ崎の蛸の浜町で聞き取り調査を行った。船大工をしていた佐々木聖氏（昭和三年生まれ）と、漁師をしていた本多由右衛門氏（大正九年生まれ）から以下のような話をうかがった。五章で取り上

▲写真 14　鍬ヶ崎の集落と宮古の港（1999 年 8 月撮影）

▲写真 15　佐々木聖氏（左）と本田由右衛門氏（右）（1999 年 8 月撮影）

げるように、蛸の浜はウミガメを祀る供養塔がある地区でもある。

カメは酒を飲ませて送ってやる。大事にした。建網にもよく入った。本多氏が上げたのははえ縄漁のとき。カギをカメのやわらかいところにかけて上げた。酒を飲ませて船名をペンキで書いて放すこともあった。この船が捕って放した、この船に漁をさずけてくれという意味。放すときは「大漁おさずけ」などといって放した。はえ縄のときは低い右舷から魚を上げるが、カメはそこから放した。とりかじでとりこんで、おもかじで荷直す。

このように、『岩手日報』の記事や『鍬浦史話』、および聞き取り結果からは、旧宮古町から旧鍬ヶ崎町にかけての地域では、ウミガメに対して大漁を願う儀礼を熱心に行っていたことがわかる。ただし、旧宮古町と旧鍬ヶ崎町を比較すると、両地区の漁業の違いも影響しているように思われる。旧鍬ヶ崎町は、宮古湾の入り口に位置し、専業漁民の多い地域であった。大多数の漁民はサッパと呼ばれる小さな磯船でアワビ、ウニ、天然ワカメ、コンブなどの磯漁や、零細な釣り漁、刺網漁に従事していたが、旧宮古町について、船主が多い地域でもあった。旧鍬ヶ崎町でも、零細な漁業を行っている漁民というよりは、船主の判断でカメに酒を飲ませて祝いを行ったり、ときには甲羅に文字を刻むことがあったということになる。『岩手日報』に紹介されていた出来事は、こうした旧宮古町から旧鍬ヶ崎町にかけての地域に広まっていたウミガメに対する習俗の発展した形と捉えることができる。

▲写真 16　宮古市重茂石浜（2000 年 8 月撮影）

宮古市ではこのほか、東の重茂半島などでも、それぞれの集落で漁業が営まれてきた。筆者は平成一一、一二年

（一九九九、二〇〇〇）に、宮古市および、宮古市の出身者に聞き取り調査を行った。重茂半島の東側に位置する重茂の石浜では石崎賢一氏（昭和一五年生まれ）から以下のような話を聞いた。

カメは定置網に捕れる。酒をいっぱい飲ませて帰す。

同じく重茂の石浜で、松野ソノ氏（大正六年生まれ）から次のように聞いた。

建網に入ったカメに酒を飲ませた。

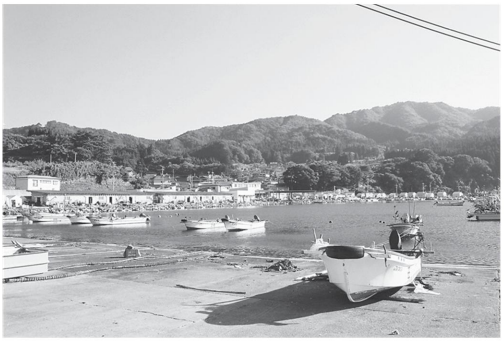
重茂の石浜は半農半漁の小集落で、五章で取り上げるように、ウミガメの祠を祀っていた地区である。宮古に比べて漁業が零細なためか、ウミガメに対する儀礼は簡単である。それでも、ウミガメに酒を飲ませて放していたことが分かる。

▲写真 17　堀内良司氏（右）・イセ氏（左）夫妻（1999 年 9 月撮影）

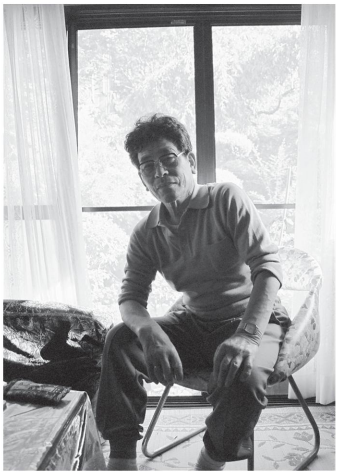
津軽石出身の中嶋勝正氏（昭和一七年生まれ）からは次のような話をうかがった。

カメは年一、二匹網にかかる。大漁を呼んでこいという意味で酒を飲ませて返す。カメも酔っ払うのか、首の辺りが赤くなる。家紋みたいなものを書いたカメを見たことがある。

宮古市赤前出身の堀内良司氏（大正九年生まれ）は、宮古のみならず、釜石方面で大謀網の網元をしてきた人物である。堀内氏は大謀をしてきた方であるため、事実を記憶しているというだけではなく、海の動きをよく把握していて、潮流や魚群の動きなどを全体的に捉えており、ウミガメの回遊に関しても論理的に理解しているのがよく分かる。堀内氏は以下のように語る。



▲写真18　釜石市箱崎白浜（2000年7月撮影）



▲写真19　佐々木長七氏（2000年7月撮影）

三陸に回遊するカメは、暖流のピーク時の八月ごろで、このころは暖寒流の端境期に当たるため魚の群れが薄く、大漁を待ちあぐんでいるので、そのときにカメが網に入ると吉兆として神様扱いをする。食用など罰当たりで口に出すことさえなかった。放したカメが魚群を連れてくるということで番屋では大振る舞いをした。捕らえるとまず陸に上げ、大きな半切樽に入れて洗い清め、酒を無理やり飲ませる。背中にその網元の屋号または屋印をペンキやタールで大きく書く。ペンキなどがないときは小刀で刻み込む。弱らないうちに海に帰した。カメは定置網の浮き（孟宗竹を一〇本ぐらい束ねたイカダで、直径一m、長さ五mぐらい）に乗っているのを見かけたことがあると聞いた。堀内氏は見たことがない。

c　その他の地域

釜石では、ウミガメに酒をのませて逃がせば大漁、網にカメがかかれば大漁、という報告がある〔岩手県教育委員会事務局文化課編　一九八二〕。久慈市、葛巻町で「網にカメがかかるは大漁の兆し」〔毛藤　一九九二〕、岩手でもカメを放すときには酒を飲ませる、とある〔岩手県教育委員会事務局文化課編　一九八二〕。岩手や葛巻は内陸であるた

め、淡水のカメでも酒を飲ませて放すことがあったということになるが、筆者は沿岸部においてウミガメの習俗のみ調査した。筆者は、岩手県では、先述の普代村、宮古市のほか、釜石市、岩泉町、田野畑村、久慈市でも聞き取りを行った。

釜石市箱崎白浜の佐々木長七氏（昭和二年生まれ）からは次のような話をうかがった。

カメはお神酒を飲ませて、捕った船名をペンキで書いて放した。大漁さずけてけろという。イカ釣りは集魚灯をつけている。サバが寄ってくる。カメが船底を行ったりきたりしている。カメはつかまえてきて見せる。酒を買って、一升瓶を口につっこんで飲ませる。大漁祈願と書いて放す。竜神様の使いだということで。カメは定置にかかる。夏だけ。突きん棒のときは、鉤で引っ掛けて持ってくる。大漁祝いにする。不漁続きのときにした。

▲写真 20　久慈市久喜（1999 年 8 月撮影）

釜石市箱崎の花渕洋氏からは次のような話をうかがった。

カメは大漁をもたらす。酒を飲ませて放せという。何年か入らない。夏に入る。涙をぼろぼろ流す。ペンキで船名と、大漁などと書いて放す。三〇年以上前、カメをよく持ってきていた。甲羅に穴を開けて、綱をつけて泳がせていた。

岩泉町では、五章で取り上げるように、茂師漁港に「海亀神社」が祀られている。カメは豊漁の縁起、海神の使いとして漁師は大切にする、という報告がある〔小島　一九七四〕。筆者の聞き取りでも、定置に入ったカメは酒を飲ませて返す、と聞いた。

田野畑村の久里十太郎氏（大正一五年生まれ）からは以下のような話を

うかがった。

龍神様の使いということで、網に入っていると大漁祈願して酒を飲ませて返した。なかには、甲羅にダシ（自分の家の記号）や「海上安全、大々漁」などと書いて放す人もいた。

久慈市久喜の伊川種蔵氏（大正八年生まれ）からは以下のような話をうかがった。

カメは生きていれば酒を飲ませて返した。おいておいて学校の生徒に見せたこともある。宇部からも見に来た。網にカメが入ると縁起がいいという。

同じく久喜の広崎国雄氏（昭和一四年生まれ）も以下のように語る。

網に入ったり、磯に打ち寄せたカメは生きていれば酒を飲ませて返した。

五　祭祀・供養習俗

1　福島県

▲写真 21　いわき市中之作・諏訪神社前の「亀大神」(2012 年 11 月撮影)

a　いわき市中之作の「亀大神」

いわき市中之作の諏訪神社の参道入り口付近にウミガメの供養塔が立っている。供養塔は石段の左側にある。以前は、この石段の上に諏訪神社があったというが、現在は供養塔の前の道路を突き当たったところの高台に移転している。筆者の調査では、供養塔が現存することを確認した。中之作にも東日本大震災の際、津波が押し寄せ、漁港

表３　東北地方太平洋岸のウミガメ祠・供養塔一覧

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高 cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
1	福島県いわき市中之作	諏訪神社境内		亀大神	石碑	159	昭和 13 年（1938）7 月 29 日建立		漁業組合		現存。	川島　2004、小島　2005、川島　2005、田口　2011	2012 年現地調査。
							昭和 27 年（1952）8 月		小漁船組合				
2	福島県南相馬市鳥崎	津神社境内		奉納亀明神　海上安全	石碑	57	昭和 39 年（1964）4 月 12 日建立	ヒラメの刺し網にかかる。			東日本大震災の津波により流失。	鹿島町史編纂委員会 1998、川島　2004、小島 2005、川島　2005、南相馬市博物館　2006、田口 2011、佐々木　2011	2012 年現地調査。
3	宮城県七ヶ浜町松ヶ浜	養松院境内→個人宅	亀霊神社→亀神様		祠	93	文化 9 年（1812）6 月 4 日死亡	約 54 メートルほど沖に浮かんでいたのを引き寄せて死亡。	漁民		現存。	「亀霊神社不死貝由来」、『いそつたひ』、七ヶ浜町誌編纂委員会　1967、川島 2004、小島　2005、田口 2011、藤井　2013	2005 年、2006 年現地調査。
4	宮城県石巻市長渡			霊亀塔	石碑	66	享保 11 年（1726）6 月 27 日建立				現存。	阿部　1990	2005 年現地調査。
5	宮城県南三陸町戸倉長清水			大漁亀	石碑	50					確認できず。	志津川町誌編さん室 1989、志津川町誌編さん室　1991	2012 年現地調査。
6	宮城県南三陸町戸倉長清水			人漁亀神社	石碑？	35	昭和 17 年（1942）8 月 7 日建立				確認できず。	川島　2004	2012 年現地調査。
7	宮城県南三陸町戸倉滝浜			丸亀神社	石碑	70	明治 38 年（1905）旧 8 月 4 日建立	網にかかる。	漁業協同組合		確認できず。	川島　2004、川島　2005	2012 年現地調査。
8	宮城県気仙沼市本吉町大谷	「奥海道」の脇			（柵）		宝暦 11 年（1761）より 50 年ほど前に埋葬	死体が漂流。	漁民	7、8 尺の大亀	宝暦 11 年（1761）には消滅。	『奥州俚諺集』、川島 2004、川島　2005、田口 2011	2012 年現地調査。
9	岩手県釜石市唐丹小白浜	盛岩寺境内	鶴亀の碑		石碑	247	文政 7 年（1824）9 月にカメを捕獲、文政 8 年（1825）春にカメは死亡、文政 12 年（1829）9 月石碑建立		住職		現存。2011 年 4 月の地震で折れる。	「角屋敷久助覚牒」、釜石市誌編纂委員会　1961、釜石市教育委員会社会教育課文化係　1982、小島　1992、藤井　2001、小島　2005、田口　2011	2000 年、2012 年現地調査。
10	岩手県釜石市箱崎白浜	港の入り口		亀供養	石碑	43	昭和 6 年（1931）旧 9 月 19 日建立				現存。	東北歴史資料館　1984、藤井　2001、川島　2004、小島　2005、田口　2011	2000 年、2012 年現地調査。

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高 cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
11	岩手県宮古市重茂石浜	石浜神社の裏山	カメ神社		祠						消滅。	東北歴史資料館　1984、藤井　2001、小島　2005、田口　2011	2000年、2012年現地調査。
12	岩手県宮古市蛸の浜	墓地の隅		亀神社	石碑	74	明治25年（1892）8月21日建立		漁民か？		1999年には見当たらない。	沢内　1955、小島　1974、小島　1984、宮古市教育委員会　1984、小島　1992、藤井　2001、川島　2004、小島　2005、田口　2011	1999年、2012年現地調査。
				亀神社	石碑	63	昭和4年（1929）8月建立		漁民か？		現存。		
13	岩手県岩泉町茂師			海亀神社	石祠	68	昭和13年（1938）旧8月5日建立		漁協		東日本大震災の津波により流失。	小島　1974、小島　1984、小島　1992、藤井　2001、三島　2004、小島　2005、田口　2011	1999年、2012年現地調査。
14	岩手県普代村堀内				木柱		昭和30年ごろ		漁民		消滅。	藤井　2001	1999年、現地調査。
15	岩手県久慈市久喜	墓地の入り口	カメノオハカ	亀山神社	石碑	103	大正14年（1925）5月12日建立				現存。	藤井　2001、川島　2004、小島　2005、田口　2011	1999年現地調査。

や海岸付近の家々は被害を受けている。しかし、諏訪神社までは津波は来なかったために供養塔も残っている。

この供養塔の由来について、現地の方に聞き取りを行ったが、小島孝夫氏の報告に詳しいので、まず小島氏の文章を引用しておく〔小島　二〇〇五〕。

昭和一三年（一九二八）七月に大しけがあった。その翌日、ある漁師がワカメ採取に出かけたところアカウミガメの漂流死体を発見した。浜まで運んで神社の鳥居の下の参道脇に埋葬し、当時の漁業組合をあげて墓塔を建立した。ところが十余年後に漁のよくない年があり同地のユウキチ稲荷という拝み屋にお伺いをたてにいったところ、アカガメ様の信心が足りないからだという御告げがあった。それで、この石塔全体にベンガラのようなものを塗りアカガメ大神として祀り直した。これが昭和二七年（一九五二）である。（筆者が文章を改変）

この供養塔には昭和一三年と二七年の銘が彫られている。小島氏の聞き取りでは、昭和一三年に埋葬し、二七年に祀り直したとある。筆者の聞き取りでは、昭和一三年のことは聞くことができなかったが、二七年に埋葬したという。聞き取りをした松本茂氏は、戦後、漁協の役員をしていた。松本氏は次のように語る。

漁協に「死んだカメどうすんだ」という相談があった。「前と同じようにしておけ」、と言った。近くに埋めておけと言った。何かあると組合に聞く。カメは神だから神社のところに埋めた。カメは埋めたらうめっぱなし。何も供養はしてない。

松本氏は埋葬した年代までは覚えておられなかったが、一三年は中学生のころなので、カメのことを相談されたのは、漁協に勤めていた二七年のころであろうという。筆者の聞き取りと小島氏の報告を合わせると、二七年に死んだカメを一三年と同じ場所に埋葬して、祀り直したということであろうか。

ここで注目されるのは拝み屋の存在である。ウミガメが祭祀されるきっかけとして、宗教者が関与していることはしばしばみられる。松本氏によると、「ユウキチ稲荷」ではなく、「要吉稲荷」であるという。正確には、長田（おさだ）稲荷といい、吉田要吉というおじいさんがやっていたために要吉稲荷ともいったとうことである。松本氏の家の前の高台にあったが、今は合併して諏訪神社境内に移っている。漁が不漁のときに拝んでもらう拝み屋であった。

▲写真 22　南相馬市烏崎・津神社　「亀明神」（右側）、「鯨大明神」（中央）の石碑（2011 年以前の撮影、南相馬市博物館提供）

▲写真 23　津神社跡地（2012 年 11 月撮影）

カメの碑
（正面）
亀大神
昭和十三年七月廿九日建設　漁業組合
昭和二十七年八月吉日　小漁船組合

高さ　一五九㎝
幅　三〇㎝
奥行き　一〇㎝

b　南相馬市烏崎の「亀明神」

南相馬市烏崎の津神社境内には「亀明神」と刻まれた石碑が立っていた。東日本大震災による津波で、烏崎地区は壊滅的な被害を受けており、津神社ともども「亀明神」も流失している。筆者が訪れた平成二四年（二〇一二）一一月段階では、集落全体が更地になっていた。「亀明神」が流失したことは、早い段階で佐々木氏が報告している〔佐々木　二〇一一〕。

烏崎の「亀明神」については、筆者自身は震災後に初めて訪れたためにまったく聞き取りを行うことはできなかった。川島氏の報告によると、ヒラメの刺し網にかかって死んだウミガメを祀ったものであるという〔川島　二〇〇四〕。

2　宮城県

a　七ヶ浜町の「亀霊神社」

文化七年（一八一〇）夏、七ヶ浜沖にウミガメが現れて、漁民たちがカメに酒を飲ませて放したことは四章で触れた。その後、彼らはカメを「亀霊神社」として祀ることになる。この事例は、江戸時代の紀行文、古文書に記載されており、また、現地に伝承とともにカメの祠なども残されているという、極めて貴重なものであったために、別に論じた〔藤井　二〇一三 a〕。ウミガメの祠は震災後も残っているようである。

ウミガメを祀るようになった背景について、「亀霊神社不死貝由来」の該当部分を引用しておく。

▲写真 24　「亀霊神社」(2005 年 8 月撮影)

浪打岸ニ引寄又以如已前之漁師酒を五合斗為呑候上、右亀ヲ能々見分仕候処、亀之せなかに貝とおほしきもの吸付居候所、如何致候哉、亀之せなかに右之貝を、はま須賀江落置申候ヲ、取上ケみかき見て候得は、何やら珍敷貝ニ御座候、大切ニ仕置申所、同年七月十五日朝飯後、常陸国加波山之洞ニ住居致候者之由ニ而、拙者方江参り右貝ヲ被見度よし被頼候間、見申候処、右之者同上ニは、是者正敷ふけすの貝ニ相違無御座候由被申候、尤右之者被相咄候者、右亀ヲ神与正宗候得ハ、浜方漁師繁昌且ハ其身家内茂繁昌可仕候、何て亀明神共奉祭可然与被為申聞候間、何茂寄合吟味之上、亀霊之神社ト正宗置申所、新宮相建候儀ニ付候而者、向々様江茂願等申上候神ニも祭り可申儀ニ御座候所、自分ニ新宮ヲ相建候儀者不折入儀ニ御座候間、此段者よろしく被仰上候様ニ被成下度奉存

候、且又亀を能々見分仕候所、何ニ被痛候哉、右之方手乃中程より喰被切至而、亀も労レ候様子ニ相見得申候間、色々介抱仕翌ニも相成舟ニ積遠沖江放シ可申与存居候処、同日八つ過手をやみ候故、終ニ落命仕候間、当はま牌所養松院地内江葬置申事御座候処、右亀を埋候塚之上ニ小キ瓦之宮ヲ相建、亀霊神社与正宗置申候間

▲写真 25 「ふけずの貝」(2005 年 8 月撮影)

要点をまとめておくと以下のようになる。文化七年にカメを放した後も、漁民たちは、毎年、ほぼ同じ場所でカメに出会う。文化九年（一八一二）六月には、弱ったカメに出会うが、カメは介抱のかいなく死んでしまった。このカメを憐れんだ漁民たちは、カメを地元の寺に埋葬して塚を作り、カメについていた珍しい貝を取って遊んでいた。その後、加波山の修行者が来たときに、この貝は不老不死の貝であり、このカメを祀れば大漁に恵まれると語る。つまり、漁民たちは素朴な感情として、何度も現れたカメが死んでしまったことを憐れんで埋葬をした。しかし、この段階では祠はなかったようである。祠を建てて、神として祀るようになったのは、よそから来た宗教者の助言によってであった。カメについていた貝も、この宗教者が不老不死の貝であると言い出したために宝物になった。この事例は、江戸時代に宮城県でもウミガメを埋葬・祭祀することがあったことを示すとともに、ウミガメの埋葬・祭祀習俗の発生には、宗教者などの関与が影響していることも示している。

b　石巻市網地島の「霊亀塔」

網地島の長渡浜に、享保一一年（一七二六）に建てられた「霊亀塔」と、享保一四年（一七二九）に建てられた「宝亀塔」がある。ウミガメの供養塔・祠のなかで、筆者がこれまで確認した建立年代のはっきりしているものとしては全国で最古のものであり、貴重な事例である。ところが、これまでは地元で紹介されている程度であり〔阿部　一九九〇、牡鹿町誌編さん委員会　二〇〇二〕、他のウミガメの民俗と比較して考察されたことはほとんどなかった。これについては、震災後に確認できていない。まず、「霊亀塔」、「宝亀塔」の内容からみておく。

・「霊亀塔」

（正面）霊亀塔

享保十一丙午年六月廿七日

根組□氏

▲写真 26　「霊亀塔」(2005 年 8 月撮影)

阿部氏市郎右衛門　建之

高さ　六四㎝

幅（最大）　四五㎝

奥行き（最大）　二三㎝

・「宝亀塔」

（正面）

石碑小松屋六左衛門□施
経日佛釋従縁起嗚呼言也予寓池濱安楽寺旧従日根組浦安部勘右兵衛門寄書々中謂市郎右衛門舩帰拾大亀夫欲成膏
由而□市也承聞亀歴万劫不忍疵之耒而引接往而視之大数尺不覚打野偈曰吾野遣教報波巨万歳乎秋息一瞬生死海中
淂超出神霊永福資黎民収衣祝之及書霊亀塔三淳而立石茲歳丁亡母通屋貞玄尼大姉三十三回忌之辰讀経餘暇欲拾小
石書妙経一部也勘衛門一志拾恵書寫既成志於茲需石於石港使人彫刻也今春三月遠凌海波運載或曰前桂林山讀誦書
寫其功不少今也海涯人迹不倒處縦立塔誰人觸勝縁不如喜事養老予曰前立塔見聞惟彰這回放海涯伸供養河沙有情況
魂滞魄不覚觸縁終跳出苦海豈少事乎況経中盲亀有遭浮木論何為容易也因而立塔伸供養添於大千云　敬白　出□没
彼　曰妙法蓮　受持讀誦　厥功無遍　書寫演説　多出述津　火宅諸
子　任三車率　聞外□子　結一乗縁　回□日漸　或密或圓　応松□物
□仰大仙　像求縮善　激起遇治　□□□吻　□不転傳　沙精進力
書寫□□　歳次巳酉　享保有年　華山之神　根組之前　隣霊亀塔
對□建□　所希　民賜和楽　國家安全
享保十四巳酉年三月廿七日前桂山人刹川楚列一枝軒楽々子七十一
而書
侍者南林宣長

高さ　一四七㎝
幅（最大）六六㎝
奥行き　五㎝

▲写真 27　「霊亀塔」(右) と「宝亀塔」(左)(2005 年 8 月撮影)

「宝亀塔」の碑文から、次のような経緯が読み取れる。安楽寺に滞在していた刹川楚列一枝軒楽々子のもとに根組浜の安部勘右衛門が訪れ、長渡浜の安部市郎右衛門の船で大きなカメを拾って帰り、このカメから脂を取って町に売ろうとしていると話した。刹川楚列が根組に出かけてカメを見せてもらうと、数尺（一七〇㎝程度）ある大きなカメであった。カメは「万歳」生きるというため、秋息して「この立派なカメは生死を海中に得て神霊を授かり、民に福をもたらしてくれるだろう」と話した。市郎右衛門は、カメは海に放して供養し、「霊亀塔」と刻んだ石碑を建立した。享保一一年は勘右衛門の母の三三回忌に当たる年であったので、読経し、一字一石の写経のため小石を拾って妙経の一部を書いた。写経がすんだために、経塚を建てることになった。この碑文は刹川楚列が書き、石巻から船で運んだ。「霊亀塔」のそばに、一字一石の経文をおさめた経塚を作り、その由来を記した「宝亀塔」を建てた。なお、刹川楚列は、勘右衛門の行為を、盲亀が浮木に出会うほどありがたいことであると記している。

▲写真 28　網地島の長渡浜（2005 年 8 月撮影）

ここからは、ウミガメから脂を取って売ろうとしていたこと、僧侶の助言によってカメを放して供養を行ったこと、などが分かる。「霊亀塔」建立の理由として、『石巻地方研究』や『牡鹿町誌』には、この直前に長渡浜で起こった遭難や大火を挙げている。享保七年（一七二二）には四〇人が遭難し、享保一〇年（一七二五）にも遭難しそうになっている。さらに、享保一〇年一二月一〇日、長渡浜を大火が襲い、一〇二戸が焼失した。「宝亀塔」の碑文から、市郎右衛門がカメを拾ったのは享保一〇年一二月から享保一一年五月ごろであったと考えられる。長渡浜が疲弊していたときに大

きなカメを拾ったために、肝入であった市郎右衛門はカメの脂を売って人々の暮らしを助けようとしたのであろうと指摘されている〔阿部　一九九〇、牡鹿町誌編さん委員会　二〇〇二〕。さらに、「亀の霊を弔う石碑を建てるという慰霊行為を通して、長渡浜に続発している災禍を防除し、今後の福徳と復興を期待した」という指摘は重要である〔阿部　一九九〇〕。

筆者は平成一七年（二〇〇五）八月に現地調査を行った。長渡浜の阿部昭一氏（昭和一三年生まれ）は次のように語る。

ウミガメの供養塔のことは、石碑が二つ並んでいるのでツルカメと呼んでいる。詳しいことは知らない。かつては、参るところに砂利を運んできれいにしていた。自分は一回参った。

喪中の人は月遅れで二月に正月をするが、そのときの注連縄はツルカメか、アンバサマに納める。アンバサマは漁神さま。ツルカメは漁神さまではない。正月のものを納めるのはみんな漁神さま。

▲写真 29　南三陸町長清水（2012 年 3 月撮影）

阿部氏は「霊亀塔」、「宝亀塔」近くに住んでいる方であるが、詳しい言い伝えは聞いていないという。石塔に文字が刻まれていることは知られていても、漢文であることもあって、何が書かれているのかは地元では知られていなかった。「亀」という文字ははっきりと分かるため、カメを祀っているものという意識はあったようである。この場合ツルは関係ないが、二つ石塔が並んでいるために「鶴亀」と呼んできたという。ウミガメの祭祀として伝承されてきたわけではなさそうである。

▲写真 30　南三陸町滝浜（2012 年 3 月撮影）

▲写真 31　滝浜の「丸亀神社」（川島秀一氏撮影）

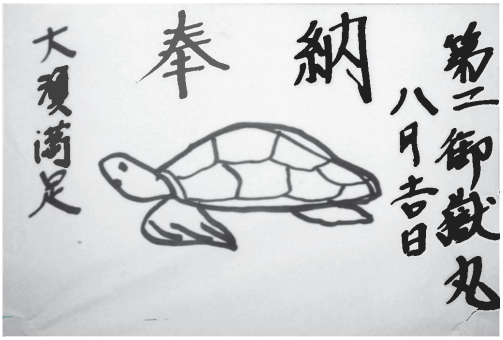
c　南三陸町の事例

旧志津川町では『志津川町誌』に戸倉長清水の「大漁亀」の石碑が紹介されている。年代は不明であり、由来も記されていないので詳しいことは不明である〔志津川町誌編さん室　一九八九、一九九一〕。その後、川島氏も調査をし、これとは別の二つの例を確認している〔川島　二〇〇四〕。戸倉長清水では「大漁亀神社」というものを報告しているが、書かれている文字や高さなどから、町誌掲載の「大漁亀」とは別物であろうと思われる。川島氏は戸倉滝浜の「丸亀神社」については、建立の経緯を聞き取っている〔川島　二〇〇四、二〇〇五〕。川島氏の『カツオ漁』には、「丸亀神社」の写真も掲載されている〔川島　二〇〇五〕。

明治三八年（一九〇五）、カメが網にかかっていたので助けた。船の乗組員一三人でカメに酒一升を飲ませて「龍宮さんへ送れ」といって放した。カメは陸へ這い上がり、カラスが飛ぶように暴れ苦しんで死んだために、漁業協同組合で供養碑を建て、法印を頼んで供養してもらった。（筆者要約）

筆者は大震災後の平成二四年（二〇一二）三月に現地を二日にわたって訪れたが、いずれの石塔も確認できなかった。戸倉地区は多くの人家が流されるなど、津波の被害を受けており、漁業再開にむけて活動されている最

▲写真 32　気仙沼市大谷（2012 年 3 月撮影）



▲写真 33　気仙沼市三ノ浜の御嶽神社に奉納されたカメを描いた紙絵馬（川島秀一氏撮影）

中であったので、この時点での聞き取りはできなかった。

d　気仙沼市の事例

気仙沼市本吉町大谷では、江戸時代にウミガメを埋葬したという記録がある。宝暦一一年（一七六一）にまとめられた『奥州里諺集　巻四』には次のように記載されている〔菅原ほか　二〇〇一〕。

本吉郡岩尻村のうち、大谷町の者五十年以前に漁りに出し者共沖中に七八尺程の大亀死して浮たるを見付、船にて引揚しよし、同町の出放れ磯際山路にて奥海道の脇に埋ミ、柵貫を立置たり、年経て今ハ柵貫も朽失たり

宝暦一一年よりも五〇年も前というのであるから、一七一〇年ごろということになる。明確な年代がわからないものの、網地島の「霊亀塔」とほぼ同じか、それよりも少し古い事例ということになる。大谷地区も東日本大震災による津波でおおきな被害を受けた。平成二四年（二〇一二）三月に訪れたときには、カメの墓の痕跡はまったく確認することはできなかった。

このほか、気仙沼市では、ウミガメの絵馬を神社に奉納したという例もある。同市三ノ浜では、網でカメを捕ま

えてしまったために、お詫びとして三ノ浜の御嶽神社に、カメの絵を描いた紙を奉納した漁船がある。不漁の原因をオカミサン（巫女）に尋ねると、カメを殺してしまったからと語られることがあるという〔川島　二〇〇五〕。

3　岩手県

a　釜石市唐丹の「瘞亀之碑」

唐丹小白浜の盛岩寺境内には、「鶴亀の碑」と呼ばれる江戸時代のウミガメ供養に関する石碑が立っている。この石碑は、『釜石市誌』をはじめとして、これまで何度か紹介されている〔釜石市誌編纂委員会　一九六一、釜石市教育委員会社会教育課文化財係　一九八二、小島　一九九二、三浦　一九九八〕。江戸時代のウミガメ供養の事例として大変貴重であり、筆者も取り上げたが、簡単に触れただけであった〔藤井　二〇〇一〕。本稿では、建立の経緯を詳しく見ておきたい。

▲写真34　釜石市唐丹・盛岩寺の「瘞亀之碑」（2000年7月撮影）

この石碑の正面には横書きで「瘞亀之碑」と刻まれており、その下には縦書きでカメを埋葬した経緯が漢文で刻まれている。以下に全文を掲載しておく。

・「瘞亀之碑」

（正面）

瘞亀之碑

五葉東奥諸山之奇、挺者蔚然而秀峭、崿嵯峨跳干乾、跨干艮嶸崢蹞躚、山脚趯走、濯乎太平洋之洪濤、峻極自成邦彊、天造之固也、西傍

▲写真 35　釜石市唐丹・盛岩寺の「瘞亀之碑」(2000年7月撮影)

乎山、東沿乎海、低仰結字、其黎庶四百戸、其民半以樵蘇魚塩為業、茲土遠都邑、其俗淳朴、従古称易治、其名曰唐丹村、文政甲申九月里人某、偶見白鶴上於岸松舟近而不起、乃載之還、未浹旬魚人挙網獲玄亀、併致諸菩提院盛巌寺焉、遐邇傳聞、観者雲集、皆以為祥、於是寺僧佛山氏籠鶴献公、公賜金助其費、吾聞鶴翔乎九霄而不為高、亀潜乎千仞而不為深、今也一朝獲之、其所以為祥者、蓋亦有以也、嗚乎輓近之弊、詭辨傷物、詐謀是務、狡黠侮事、唯利是趨、使其獲之、其嚮市投屠也必矣、曁越乎月亀斃、埋諸寺側、使余撰文勒石以示永久矣、善哉里人之挙也、鶴固得其所、亀亦死而不死矣、所謂俗之淳、易治之風、於是乎可観矣、本山住持、心宗氏聞此挙也、別寄題亀鶴峯三字斯亦一事也是宜銘、銘曰

鶴舞仙闕、霜毛連翩、清唳披雲、聲聞干天、
亀潜幽室、與地晏逸、厥霊弗死、俾民守一、
江右涙原之二水勾流文王所都、家在於五葉山中白雲深處、
文政巳丑九月落焉　　幹事上村市郎太得安

(石碑本体)
高さ　二四七cm
最大幅　八三cm

奥行き　四七㎝
（台座）
高さ　一九㎝
幅　一三七㎝
奥行き　七九・五㎝

この漢文の概要を記すと次のようになる。文政七年（一八二四）九月、唐丹の里人が漁に出た際、岸の松で飛べない鶴を見つけて船に乗せて帰る。それから一〇日もしないうちに漁師が網にかかったカメを捕えて帰り、ともに盛岩寺へ納めた。これが四方に伝わり、吉祥ということで多くの見学者が集まった。そこで、盛岩寺の仏山和尚は鶴を藩主に献上し、恩賜金を下賜された。カメを商売で殺す者が出ないかと心配していたところ、カメは死んでしまった。そこで、里人はカメを寺に埋め、葬るために文章を石に刻んだ碑を建てた。

▲写真36　倒壊した「瘞亀之碑」（2012年8月 撮影）

江戸時代、唐丹村を含む気仙郡は、伊達藩に属し、これより以北の南部藩との境界に位置していた。ここでいわれている藩主とは仙台の伊達氏のことを指している。殿様に献上しないで死んでしまったカメを埋葬して、碑文を刻んだ石碑を建てることにかかわったのは、当時の盛岩寺の住職であったようである。

この碑文以外にも、当時の様子を記した古文書が

残されている。その古文書とは、気仙郡今泉村出身で広田村（現在、陸前高田市）の検断（宿場町に置かれた役職で、司法・行政を扱う）などの要職を歴任した角屋敷久助という人物が書いた「覚書」である。文化年間（一八〇四～一八一八）から天保年間（一八三〇～一八四四）に、角屋敷久助が見聞きしたことを四三巻の覚書として残したもので、一般に「角屋敷久助翁覚牒」と呼ばれている。気仙地方の庶民の様子がよく記録されていて、民俗学的にも貴重な資料である。以下に該当部分を引用しておく〔渡辺　一九九四〕。

一、文政七年九月、唐丹村小白浜引網へ亀あい入り、漁取り同所曹洞宗盛岩寺池へはなし置き候えば、同十四日昼鶴来たりて亀をながめいるにつき、同所検断丈吉倅清治という者立ち寄りて、おさえ候に飛ぶけしきなく、誠にふしぎなること、いうにのべがたく宝来山とはこのことなるべしとて、御上様へ同月十五日申し達し候こと。

但し鶴は文政七年十一月御上様献上、亀はその後死に候由。盛岩寺へは八年五月、金二百疋くだしおかれ候こと。

（中略）

一、唐丹村にて鶴亀集り候に付き、右の段御上様へ申し上げ候えば、同年十一月鶴は御城下へあいのぼらせ候様仰せ渡され、同二十八日今泉町出立、あいのぼらせ候ところ、取扱人あい付け候様仰せ渡され、一人御城下まで

▲写真 37　倒壊した「瘞亀之碑」（2012 年 3 月撮影）

付添い上り候こと。

板にてかごのごとく拵え、左右をしの竹格子にいたし、食物はとうふを長さ一寸五分程、厚さ二分程にいたしくわせ候。または土中のみみずを洗い候て食わせ候に付き、右かごの中へ水箱ならびにとうふ箱拵え入れ置き候。水箱は六、七寸四方。とうふ箱長さ一尺五寸程横六、七寸程。竹格子外へござをかけ、立札へ御用鶴と書きつけ候こと。御首尾合わせは大肝入・御代官御首尾。宿継ぎ御人夫つけ遣わす。亀は御用にこれなく仰せ渡され、唐丹へ囲い置き候由のこと。

但し亀は寒に至り候えば、生なきの如くにあいなり候由にて、翌春に至り亀は死す。

▲写真 38　「瘞亀之碑」が建っていた場所（2012年 8 月撮影）

「瘞亀之碑」と「角屋敷久助翁覚牒」の内容は若干異なっている。盛岩寺境内にツルとカメが集まったということは事実であろうが、「瘞亀之碑」ではまず漁師がツルを捕えてきてからカメが網にかかったというが、「角屋敷久助翁覚牒」ではカメが網にかかってからツルが飛来したとしている。いずれにしても、盛岩寺境内の池にウミガメを入れ、近くにツルがいたために「為祥」もしくは「宝来山」であるとして喜ばれ、仙台の藩主の耳にも達するまでになったというところは一致している。「角屋敷久助翁覚牒」で興味深いのは、ツルを仙台まで連れて行く際の様子が克明に記されているところである。ところが、カメは「御用」ではないとされ、冬には死んでしまったという。仙台の藩主にまで聞こえたということであるから、当時は相当騒がれた出来事であったと思われ

る。ただし、「角屋敷久助翁覚牒」にはカメを埋葬して碑を建立したことまでは書かれていない。

筆者は盛岩寺に、平成一二年（二〇〇〇）七月と震災後の平成二四年（二〇一二）三月・八月に調査で訪れた。住職の三宅俊禅氏によると、「痙亀之碑」については、言い伝えでは次のようにいわれていたという。

本堂の西側に池があった。池の中に島があった。そこに鶴が何回もきた。つかまえて、伊達の殿様に献上した。お金をいただいて、そのお金で白衣一疋、あわせ二反を作った。寺宝としておいていた。大正二年に村の大火で寺が焼けたときに白衣も焼けた。カメは埋めて碑を建てた。

その後、カメの碑は「鶴亀の碑」と呼ばれて伝えられてきた。ただし、三宅氏によるとと、「鶴亀の碑」は寺の門の外に立っていたという。唐丹では浜街道が海沿いから上がってきて盛岩寺の近くを通り、さらに山へ登って本郷のほうへ通っている。その浜街道から寺へ来る参道が分かれていた。街道から参道に入ったあたりにカメの碑が立っていた。碑が立っていたところを道路にしたので、門の中の松の横に移していた。この碑の前で祭りをすることなどはなかったようである。

東日本大震災による津波は唐丹地区にも襲った。三宅氏にうかがった唐丹小白浜の被害状況を簡単にまとめておく。小白浜では盛岩寺の付近が最も海抜が高い。そこにも津波は押し寄せた。海抜二四、五ｍの高さまで津波が来た。一二ｍの防潮堤が崩れ、海岸近くの五〇何戸かの家が流された。小白浜は湾の一番奥に位置するので、両側から津波が来て、ぶつかって高くなったという。明治二九年、昭和八年の津波でも小白浜は大きな被害を受けたが、

▲写真 39　唐丹小白浜（2000 年 7 月撮影）

盛岩寺までは津波が襲うことはなかったようである。盛岩寺近くの高台は、昭和八年の津波後の復興地として整備された場所であったが、今回はそこまで津波が襲った。盛岩寺では山門が本堂前の階段まで流され、本堂はがれきの山になった。山門と本堂の間に立っていた「鶴亀の碑」は、流されずに松に寄りかかって残った。ところが、四月七日の余震で二つに折れた。筆者が訪れた平成二四年三月と八月の段階では、山門や庫裏を修復中であり、折れた「鶴亀の碑」は横倒しにして本堂左側に置いていた。平成二五年（二〇一三）七月に電話で三宅氏に問い合わせたところ、「鶴亀の碑」については昨年のままで、庫裏の復旧工事に取り掛かっているところであるという。庫裏復旧後に「鶴亀の碑」を復元したい、とのことであった。

b　釜石市箱崎白浜の「亀供養」

大槌湾に面する箱崎白浜の漁港の入口に「亀供養」の石碑が立っている。これは、『三陸沿岸の漁村と漁業習俗』上巻に写真が紹介されているが、建立の由来などは記されていない〔東北歴史資料館　一九八四〕。筆者は平成一二年（二〇〇〇）七月に現地を訪れて聞き取りを行い、ウミガメ放流の習俗などについては話をうかがうことができたものの、「亀供養」についてはよく分らなかった。建立された九月一九日は、地元・箱崎白浜の氏神の祭礼日であるため、祭りにあわせて建立されたと思われる。川島氏もこの地区については調査をされているが、この石碑に関する由来は報告されていない。東日本大震災では、大槌湾の奥に

▲写真40　釜石市箱崎白浜の「亀供養」(2000年7月撮影)

位置する大槌町、釜石市鵜住居地区などに大津波が押し寄せ、甚大な被害が出ている。箱崎白浜地区にも大津波は押し寄せ、四〇数人が亡くなり、流された人家も多数あるなど被害は大きかった。しかしながら、漁港の入口に立つ「亀供養」は不思議なことに流されることなく、残されている。鳥居の上が流されただけであるという。

「亀供養」の石碑

（正面）昭和六年旧九月十九日

亀供養

▲写真 41　釜石市箱崎白浜の「亀供養」(2000 年 7 月撮影)

▲写真 42　東日本大震災後の「亀供養」(2012 年 8 月撮影)

▲写真 43　東日本大震災後の「亀供養」(「八龍王」の左側)(2012 年 8 月撮影)

船主　佐々木□外一同

高さ　約四三㎝
幅　約三〇㎝
奥行き　約二〇㎝

c　宮古市重茂石浜の「亀神社」

重茂半島東側に重茂石浜地区がある。『三陸沿岸の漁村と漁業習俗』上巻には、「岩手県宮古市重茂石浜」の章の「漁浦の信仰」の項に、「亀神社（創建の年代は不明、祭神は亀）」と記されている〔東北歴史資料館　一九八四〕。平成一二年（二〇〇〇）七月に現地調査を行ったところ、石浜でも「亀神社」について知らない方も多く、祠なども残っていなかった。石浜神社の別当をしていた石崎賢一氏（昭和一五年生まれ）によると、石浜神社境内の裏山には一〇ぐらいの小さな祠があり、そのなかにカメを祀ったのがあったという。昭和五〇年代まであったが、祠が崩れてきて、修理をするのが大変なので一つに合わせ、境内の加倉神社の中に合祀したという。裏山には跡地だけある。戦前に神社の別当をしていた石村辰之助が祀っていた。この人物は、郡会議員や漁協の役員などもしていて、点在する個人の神を集めて、神社の裏山を神の森にしたいと計画していたという。「亀神社」については、石村氏が祀っていたものであるというが、建立された経緯などはすでに分らなくなっていた。東日本大震災による津波では、重茂石浜にあった三三軒のうち六軒が流されたという。平成一二年（二〇〇〇）の調査時には石浜神社の下の道端に

▲写真44　東日本大震災後の「亀供養」（2012年8月撮影）

▲写真 45　石浜神社（2000 年 8 月撮影）

▲写真 46　石浜神社（2012 年 8 月撮影）

「西国巡礼塔」、「海嘯記念碑」などの石碑が並んで立っていたが、平成二四年（二〇一二）八月には、この場所に石碑は残っていなかった。

d　宮古市鍬ヶ崎蛸の浜町の「亀神社」

鍬ヶ崎の蛸の浜町に「亀神社」があることは、沢内氏、小島俊一氏、宮古市教育委員会によって報告されていた〔沢内　一九五五、小島　一九七四・一九八四・一九九二、宮古市教育委員会　一九八四〕。このうち、鍬ヶ崎の歴史、民俗について地元の沢内氏がまとめた『鍬浦史話』には、「漁村雑話」という章の「漁村の慣習断片」という節のなかに「亀神社」という項目が立てられている。蛸の浜の日和山に、明治と昭和の二つの石碑があるという。「死亀を丁寧に埋めた土塚に建てられた供養の石塔」であるとしているが、詳細については書かれていない。川島氏も沢内氏の報告を引用しながら取り上げている〔川島　二〇〇四〕。筆者は平成一一年（一九九九）に現地調査を行い〔藤井　二〇〇一〕、平成二四年（二〇一二）に再度訪れた。

蛸の浜の集落から蛸の浜（名勝浄土が浜の北隣の海岸）へ出る峠に心公院があり、心公院と海岸との間の丘の上

▲写真 48　宮古市蛸の浜町の「亀神社」(左側)(1999 年 8 月撮影)

▲写真 47　宮古市蛸の浜町の「亀神社」(1999 年 8 月撮影)

に墓地が立地している。墓地の隅に「亀神社」は立っている。「亀神社」の横には難船溺死者を供養する石碑と「加州通福丸難船供養」の石碑が並んで立っている。これらはいずれも年代は刻まれていない。沢内氏、小島氏、宮古市教育委員会の報告では、明治と昭和の「亀神社」があるというが、平成一一年に筆者が確認したところ、昭和四年の「亀神社」以外は確認できなかった。(7) 川島氏も明治の「亀神社」は引用しているのみで、確認できていないようである〔川島　二〇〇四〕。

心公院住職の牧野栄山氏によると、「亀神社」の石碑は見る人がいないので、代替えの墓地をもらったとき、寺で移した、という。ただし、明治の「亀神社」についてはご存知ないという。蛸の浜の佐々木聖氏(昭和三年生まれ)と本多由右衛門氏(大正九年生まれ)によると、二〇年以上前に、橋ができて墓地を整理するまでは、「亀神社」は寺から浜に向かう途中の坂の上にあった、という。ただし、建立された経緯などは知らないという。蛸の浜の集落は東日本大震災による津波で甚大な被害を受けている。宮古湾から流れ込んだ津波により、多くの人家が流された。一方、蛸の浜から心公院の前の道も、津波が越えていったという。しかし、「亀神社」は心公院よりも上の墓地に立っているため、

▲写真49　宮古市蛸の浜町の「亀神社」(2012年8月撮影)

▲写真50　宮古市蛸の浜町の「亀神社」(2012年8月撮影)

津波の被害を受けていなかった。平成二四年(二〇一二)八月に再訪したときも「亀神社」は草に覆われて残っていた。

「亀神社」
(正面)亀神社　昭和四年八月　妙幸丸船頭小本喜三郎　外一同建立
高さ　六三cm
幅　三一cm
奥行き　一六cm

e　岩泉町の「海亀神社」

岩泉町茂師に「海亀神社」があることは、小島俊一氏が報告していた〔小島　一九七四・一九九二〕。筆者は平成一一年(一九九九)に現地調査を行った。詳しい由来については分からなかったが、「海亀神社」は確認することができた。「海亀神社」は、茂師の漁港を見下ろす高台に、他の祠や供養塔などと並んで建てられていた。石で刻んだ小さな祠であった。震災後の平成二四年(二〇一二)八月、同じ場所を訪れた。石の祠や石碑などが立ち並んでた場所には酒などが供えられていただけ

で、何も残されていなかった。小本の漁協に問い合わせたところ、平成二三年（二〇一一）三月、一〇mを越える津波が襲い、港の上にあった祠などはすべて流されたという。平成二三年の夏、海底調査で二つの石碑などが見つかり、引き上げられた。石碑の中で最も大きかった「魚霊塔」と、大天狗の祠であった。その後、これらを引き上げて、茂師港の別の場所に建てたという。「海亀神社」はいまだに見つかっていない。ここに、「海亀神社」を含めて、茂師港で震災前に撮影した写真を掲載させていただく。

「海亀神社」
（正面）奉遷宮海亀神社

▲写真51　岩泉町茂師の「海亀神社」（1999年8月撮影）

▲写真53　「海亀神社」背後から海を望む（1999年8月撮影）

▲写真52　茂師港の上に立つ石塔群（右側のひとつが「海亀神社」）（1999年8月撮影）

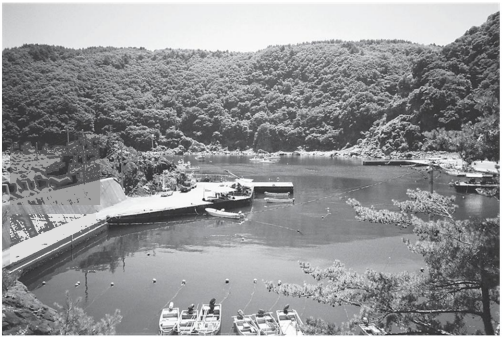
（右側面）茂師　小成　組合一同
（左側面）昭和十三年旧八月五日
本体高さ　五六cm
幅　一二cm
奥行き　一八cm
台座高さ　一二cm
幅　三九cm
奥行き　三四cm
屋根高さ　二〇cm
幅　三五cm
奥行き　三三cm

f　普代村のカメの供養塔

普代村堀内でウミガメに関する聞き取りをしていたとき、以下のような話をうかがった。普代村では、ウミガメの供養塔などはこれまで報告されておらず、初めて確認された事例である。『普代の石

▲写真 54　「海亀神社」跡地（2012 年 8 月撮影）

▲写真 55　「海亀神社」跡地背後から海を望む（2012 年 8 月撮影）



▲写真 56　茂師の港（1999 年 8 月撮影）

▲写真 57　茂師の港（2012 年 8 月撮影）

▲写真 59　久慈市久喜の「カメノオハカ」(中央右側)(1999 年 8 月撮影)

▲写真 58　久慈市久喜の「カメノオハカ」(1999 年 8 月撮影)

碑』などにもウミガメの墓、祠に関しては記述がない〔普代村教育委員会　一九八四〕。以下の聞き取りによる供養塔も平成一一年（一九九九）段階で、すでに残っていなかった。金名部直徳氏（昭和九年生まれ）は以下のように語る。

間違って死んだカメは埋めて供養塔を立てた。昭和三〇年前後、父親が大謀のときに、直徳氏が寺から供養塔を三輪トラックに乗せてきた。一〇m四方くらいで二mくらいの高さのものであった。戒名は先代の和尚さんに書いてもらった。船を巻き上げるカグラさん（マキドウという人もいる）で上げた。カメを埋めた辺りは、フノリなどが生えるところで、カメの供養塔の下でフノリ大漁したとか、マツゴ大漁したとかいい、目印としていた。何年か前に供養塔は倒れた。松磯の建物の真下に五、六坪の平らなところがあり、そこに埋めた。

g　久慈市久喜のカメノオハカ

久慈市久喜でウミガメを供養するということは、早坂氏が報告している〔早坂　一九八一〕。カメが死んで岸へ寄ってきた場合は、引き上げ

て、部落全体で和尚さんを呼んで、大漁祈願をする、とある。平成一一年（一九九九）に現地調査を行ったところ、墓地の一角にカメノオハカと呼ばれる石碑が立っていることが分かった。この事例については、震災後に確認していない。

久喜の伊川種蔵氏（大正八年生まれ）は以下のように語る。

死んだカメは神様みたいなことで葬った。埋めたのは一回ではない。網にカメが入ると縁起がいいという。和尚さんを呼んだかどうかは分からない。大漁祈願はしない。カメを埋めたところは墓の下であったが、今は周辺にも墓が広がってきている。

同じく久喜の広崎国雄氏（昭和一四年生まれ）は以下のように語る。

死んだカメは墓に埋めた。ここはカメノオハカといっていた。亀神社などとはいわない。今も盆にローソクや線香をもって行き、祀っている。ここで大漁旗願をすることはない。昭和二〇年代に何回か埋めた。最近はカメが上がらないので葬っていない。

（石碑正面）亀山神社　大正十四年五月十二日　坂本福男　仲村卯之松　廣崎熊蔵　仲村春松
嶋谷勘助
（石碑裏面）漁栄丸　漁運丸　久栄丸　久喜丸　廣吉丸　井網　高嶋丸　メ網　八幡丸　廣吉丸
（台座正面）奉納　屋形建網　昭和廿四年□月五日竣□

本体高さ　一〇三cm
幅　五三cm

▲写真 60　相馬市磯部・寄木神社に奉納されている絵馬（2012 年 11 月撮影）

▲写真 61　磯部の集落跡と海岸（2012 年 11 月撮影）

奥行き　一一cm
台座高さ　一五cm
幅　一三cm
奥行き　三一cm

六　流木

ウミガメは海上で、流木にまとわりついていることがある。ウミガメが流木とともにいるところを見つけると、この流木を拾い上げて大事にするという習俗が存在する。この習俗は、江戸時代から確認でき、全国的に分布している。こうした習俗が東北地方の太平洋沿岸でもみられる。

1　福島県

相馬地方では、このような流木をカメノマワシギと呼んでいる。カメは波間に浮いている木切れをくるくる回して遊んでいることがある。この木をカメノマワシギといっている。相馬地方では、船霊に入れるさいころは柳の木で作るが、カメノマワシギで作るとなおいいという〔和田　一九七八〕。

相馬市磯部の寄木神社には、カメが流木を背負っている様子を描いた絵馬が掲げられている〔川島　二〇〇四、南相馬市博物館　二〇〇六〕。この絵馬の由来は不明であるが、寄木神社の御神体は海から流れ着いた木といわれ

ている。縁起にはカメは登場しないが、カメノマワシギの伝承と、ご神体の伝承が融合した絵馬となっている。磯部の集落は、東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた。ただし、寄木神社は海岸の高台にあるため、建物も絵馬もそのまま残っていた。

2　宮城県

昭和二六年（一九五一）、『民間伝承』一五巻一一号に、丹野正「亀のしょい木、亀のしょい石」という報告が掲載されている。この号は、柳田国男の七七歳を祝っての『民間伝承』の特集号である。巻頭には柳田の「知りたいと思うこと二三」を掲載している。このなかには「寄物のこと」という項目がある。各地の民俗学者から投稿された寄物に関する事例報告を並べた中に丹野の文章も収められている。

丹野が報告する事例の内容は以下のようなものである。陸前桃生、牡鹿の沿岸に、「亀のしょい木」、「亀の廻し木」という寄り物がある。長い材木などを一本、甲羅に載せて、ゆっくり回しながら船の周りを悠々と泳いだり、岸の方まで来ることがある。見つけた者が拾い上げて、招福の宝物にする。また、「亀のしょい石」というのは、丸い玉のような石を甲羅に載せて泳いでいることがあるという。牡鹿鮎川の阿部善右衛門という漁師がカメが石を背負っているのを見つけ、慌てながらタモですくった。底の平たな黒くて丸い石で重いものであった。善右衛門はすでに故人であるが、家宝として今も石が保存されている。この家にはしょい木もあるという。

▲写真62　カメノマワシギ
（2006年7月撮影）

この事例について、平成一七年（二〇〇五）、石巻市合併前の鮎川町で調査を行ったが、阿部家のことも流木のことも確認することができなかった。

川島氏は、宮城県気仙沼市唐桑町の事例として、以下のような報告をしている〔川島　二〇〇四〕。ただし、現物については、川島氏も確認していないようである。

カメは小さな材木を枕に浮かんでいることがある。こうした材木をカメノマスギといって縁起物であり、拾うことがあった。沖でカメを見つけると、「大漁させろよ」と言って、木っ端をカメに投げ与えることもあった。

（筆者要約）

宮城県では、七ヶ浜町において、流木の現物を確認することができた〔藤井　二〇一三a〕。加藤実氏（昭和一一年生まれ）の家では、ウミガメが遊んでいた木を床の間に飾っている（写真62）。カメがくるくる回して遊んでいたといい、それを拾ってきたという。実氏のおばあさんは、この木のことをカメノマワシギと言っていたという。実氏は、自分の家で船を持っていたころのことであるから、明治よりも前のことであると考えている。震災後に電話で確認したところ、流木は残っているようである。

カメノマワシギ
長さ　八二cm
最大直径　八cm

3　岩手県

川島氏は、岩手県釜石市箱崎白浜の事例として以下のような報告をしている〔川島　二〇〇四〕。

カメノトマリギを見つけた場合は、それを持って帰り、氏神にあげて拝む。（筆者要約）

筆者も平成一二年（二〇〇〇）、二四年（二〇一二）に箱崎白浜で調査を行ったが、流木を見つけることはできなかった。

普代村の金名部直徳氏（昭和九年生まれ）からは、以下のようなことを聞いた。

ひいおじいさん（昭和三二年に七二歳で亡くなる）が八丁櫓で三昼夜で戻ってくる巻き網の漁に出ていたとき、「カメの甲羅干しを見てきた」と言っていたのを聞いた。大きい木の板の流れ物につかまって流れていたという。カメの甲羅干しというのは漁師仲間ではよくいっているが、木を拾うというような話は聞かない。

普代村の伝承は、ほかの地域の事例と若干異なっており、流木を拾い上げてはいない。ただし、普代村では広く知られた伝承であったようで、昭和一〇年代生まれの方であれば、「カメの甲羅干し」という話はよく聞いたという。たとえば、子供が海水浴で浜で腹ばいになっていると「カメの甲羅干しだ」などといったという。

漁師は黒くないといけないということで、カメの甲羅干しといって背中を焼いた。

桜田調査時以前には、土用明けからアワビのクチアケまでカツオ釣り船も出ていた。

4　青森県

青森県八戸市鮫の亀遊山浮木寺の事例は江戸時代のものである。天保六年（一八三五）に俳諧師の三峰館寛兆（松橋宇助）（安永六（一七七七）～安政二（一八五五））が「蕪島之記」というものを著しており、このなかに浮木寺の観音についての記述がある。川島氏が『浮木寺誌』掲載の「蕪島之記」をもとに八戸市立図書館所蔵の複写本で補って翻刻したものを引用する〔川島　二〇〇四・二〇〇五〕。

此菩薩の昔話を尋るに、此鮫に喜八と申船頭有。海路の営を業となしにけるに或時遠沖を走り、懸るの砌、し

ら魚のえさわり其詠ずべき夜の静きに、睡眠を催す折から、盲亀の浮木に乗曇優花の花見るなるか告て曰、此の浮木を取揚三十三観音となし、我在所に勧請すべしと。夢醒て後忘るべくも非ず、船中の者共と語ひ、しかるべき幸ひあらんと神酒なと捧け、船霊を祭りける。然處にその翌日海上遥に浮木とおほしき物漂ふ有。順風矢を射る走り帆の習ひならめ、角してちか〳〵と漕き寄見れハ、正敷夜前の霊夢に違ハす。奇異の思ひをなし信心肺腑鳴動し材木を流しやり、浮木と被替取揚けれハ、亀は被替し材木へ乗よろこべるければ沖へ出ぬ。扨こそ浮木を積登り、大都会にて毘首燭摩共可讃佛師を尋ね、其次第こま〳〵と話諾しつゝを置、喜八存生のうちは更也、後に迄も伝ひ置出入船年々の寄進自他の本願を以て三十三観音の成就の日至り、上の山に於て地面免許、寛延二年始は僅の草庵を立、浮木観音と尊敬し奉り、海上安全の祈祷所に敬愛善院道師にて遷宮せしとかや…

▲写真 63　鮫の港から浮木寺を望む（2012 年 8 月撮影）

▲写真 64　三十三観音（2012 年 8 月撮影）

同じく、寛兆が嘉永年間（一八四四〜五三）に描いた「八戸浦之図」という絵図がある。この絵図は、沖から八戸の陸地を遠望した構図になっており、漁業の様子なども描かれている。詞書もたくさん書きこまれている。この絵図に

も浮木寺のことが書かれている〔八戸市史編纂委員会　二〇〇八〕。

又観音堂あり、此観音、むかし盲亀の浮木に逢て乗来りしを、船頭沖にて見付、乗来りし浮木と船中の材木と取替、亀ハ沖へ流し遣り、其浮木を以て作りなせる観音にて浮木山と云、祈念するに霊現あらたにて信心者多し、此節ハ取分往来の船々寄進もありて相続す、尼寺也、継尼無之時ハ村の老分持之、大慈寺末山也

「盲亀の浮木」というのは、法華経のたとえである、法華経に出会うことは、盲目のカメが流木に出会うというぐらい、ありがたいことである、という意味である。歌舞伎などにも使われている表現であるため、江戸時代には広く知られる言葉であったと思われる。「盲亀の浮木」という言葉を知っていた八戸の船頭は、夢を見てから海上でカメが流木を持っているのを発見、この流木を拾い上げて、「大都会」に持ち込んで、流木で三十三観音を刻んでもらう。この観音を安置した寺を開いた。これが寛延二年（一七四九）であったという。寛兆が縁起を記したときよりも、八六年ほども前の出来事ということになるが、江戸時代の八戸ではかなり有名な話であったと思われる。鮫は江戸時代には大きな船が停泊できる港であり、昭和時代になっても漁民より海運業に携わる人が多い地域であった。廻船にかかわる人が、ウミガメが持っている流木を拾い上げたというものであり、全国的にみても、かなり古い事例になる。

ところが、『浮木寺誌』掲載の由緒では、これと若干異なる内容が記されている。明治八年に曹洞宗宗務局に提出された浮木寺の「由緒」では、以下のように記されている。

本尊西国三十三観音　三十三体

右者先年ヨリ当村船頭嶋脇喜八ト申者霊夢ニ而海上安全不思議之霊樹ヲ拾得而右樹木早速西京大仏師迄為積登彫刻差下今之三十三観音是也（後略）

▲写真65　浮木寺のウミガメ（2012年8月撮影）

また、明治時代に書かれた「開闢以来浮木寺事実」では以下のように記されている。

宝暦七年中有ル夜鮫浦船頭嶋脇喜八氏霊夢ヲ感見シ而メ海辺ニ於テ浮木ノ漂流セルヲ拾ヒ得テ即チ西国三十三ケ場ノ観音大士尊像ヲ模彫シ（後略）

喜八が夢を見てから流木を拾い、その木で観音を刻んでもらったことは寛兆の文章と一致している。しかし、これらの文書には、カメの姿が出てこない。また、浮木寺が開創されたのは宝暦七年（一七五七）となっている。とくに、明治八年の「由緒」は、浮木寺が正式に寺院に認可されるための申請であるため、カメなどの言い伝えは排除し、事実として理解されやすい部分のみ記したとも考えられる。ただし、全国各地の類似の例を比較した場合には、ウミガメが流木を持って浮かんでいることは実際にみられる自然現象のようである。寛兆のほうがより古い時代に伝説を聞いて記していることもあり、また、亀遊山という山号をつけていることなどから考えても、浮木寺の開創にウミガメの流木がかかわっていることは間違いないであろう。

ところで、『浮木寺誌』には、言い伝えられている伝説も掲載されている。ここでは、喜八が夢を見てからウミガメに流木をもらったこと、この木を京都に持ち込んで仏師に三十三観音を刻んでもらったこと、観音を祀る堂を建てて海上安全の祈願所としたこと、などが書かれている。

この言い伝えについて、浮木寺住職の中村好伸氏にも話をうかがったところ、喜八の子孫は浮木という苗字で、

現在も鮫におられるという。浮木家の墓には喜応良専発心上座という名前が刻まれている。これは浮木庵を作った開山の名前と一致するという。

浮木寺では、中村氏の先代住職の時代に、縁起に関連して、ウミガメの剥製を集めていた。今もいくつか安置されている（写真65）。

震災後に、浮木寺を訪れたが、燭台が一つ倒れただけであったといい、ウミガメの流木で彫ったという観音像に被害はなかった。浮木寺は鮫地区の高台にあるため、津波の被害はまったく受けていない。

▲写真66　苕野神社に奉納されたオサガメ（昭和初期撮影、南相馬市博物館提供）

▲写真67　黄金山神社に奉納されたウミガメ（2005年8月撮影）

七　剥製・甲羅

東北太平洋岸では、ウミガメの剥製を神社に奉納したり、漁民の家で飾るという習俗もある。

福島県浪江町請戸の苕野神社では昭和初期、オサガメが安置されていた。昭和初期、請戸浜に上がったオサガメを請戸漁協一同が苕野神社に奉納したときの写真が残されている（写真66）。甲羅は昭和

▲写真68　鮎川の土産物屋で販売されているウミガメ（2005年8月撮影）

三〇年代まであったが、盗難にあってなくなった〔南相馬市博物館二〇〇六〕。写真のオサガメは膨張しているので、死んでしばらくたっているように思われる。震災後、浪江町請戸地区は福島第一原発から一〇キロ圏内にあたるため、立入禁止区域となっている。したがって、現地調査は行っておらず、南相馬市の二本松文雄氏から教えていただいた。二本松氏にこの事例を語ってくれたのは、苕野神社前宮司の鈴木澄夫氏であったが、大震災の津波で亡くなった。写真66は南相馬市博物館に複製が保管されていたため、そちらを借用して掲載させていただいた。

福島県いわき市小名浜でもカメは珍しいから剥製にして飾ることがあると聞いた。

宮城県石巻市鮎川の山本春人氏からは、自身が金華山（黄金山神社）にウミガメの剥製を奉納したとうかがった。鮎川の漁民が金華山で流し網で捕ったもので、石巻の剥製屋に持って行って剥製にしてもらったという。金華山黄金山神社で話を聞くと、とくに祀っているということではなく、大広間の棚に飾っているという（写真67）。カメの横には、「南の島から黒潮と一緒に金華山を訪づれた亀　巳歳御縁年記念工事竣工記念　平成十五年四月吉日　金華山黄金山神社　責任役員　山本春人」と書かれた色紙が立てられている。

鮎川ではカメはおもに巻き網に入るので、自分で捕ったカメを剥製にし、自分の家で赤いざぶとんを敷いて座らせておいたという人もいる。剥製を家に吊るしておく人もいるという。また、鮎川ではかつてはウミガメの剥製を

売っていたということも聞いた。新築祝いなどに喜ばれたというが、今では売っていない。ウミガメだけでなく、大きいものが新築祝いなどに喜ばれたという。

八　考察

1　東北太平洋岸におけるウミガメの民俗の特徴

東北地方は産卵地から離れているためにウミガメの生態調査は限られていたが、沿岸部の人々は古くからウミガメがいることは認識していた。産卵は福島県と宮城県でごくわずかに見られるだけであるため、産卵に関する民俗知識はほとんどみられない。しかし、定置網などに混獲されるほか、海岸に漂着することもある。とくに定置網やカツオ漁などを行ってきた漁民は、ウミガメに出会うことがしばしばあり、黒潮に乗って夏場に回遊してくることが認識されていた。

ウミガメを食用などに利用にする習俗は、縄文時代には存在したようである。江戸時代から昭和時代にかけても、ごくまれに見られるものの、一般的ではなかったようである。

ウミガメに関する伝説もみられる。福島県いわき市には浦島伝説が伝わっているが、宮城県以北では伝説は多くはないようである。

東北太平洋岸において、最も広く確認できるのはウミガメの放流習俗である。東北の漁民の間では、ウミガメは神や縁起物と考えられており、定置網にウミガメがかかった場合や岸に寄っていた場合などに、ウミガメに酒を飲ませて海に放すということが行われてきた。ときには、海上にいたウミガメをわざわざ捕まえて、酒を飲ませて放流するということもあった。ウミガメに酒を飲ませて放すという習俗は、江戸時代には、宮城県七ヶ浜町で伝承されていたため、少なくとも江戸時代の中期ごろには東北一帯に広まっていたと思われる。ウミガメを放す場合、酒

を飲ませるだけでなく、ウミガメに対して「大漁させてくれ」というような声を掛けることもあった。なかには、カメを放すときに、カメに赤い手ぬぐいをしめる、カメの口に生米やおにぎりを入れる、というような事例もみられる。東北各地の報告や筆者が確認した事例を合わせると、ウミガメに大漁を願う声を掛け、酒を飲ませて放すという習俗は、昭和時代まで東北太平洋沿岸部一帯で広く行われてきたようである。

また、ウミガメを放す際、ウミガメの甲羅に大漁・海上安全の祈願文、船の名前、神仏の名前などを書くこともあった。江戸時代の七ヶ浜町の事例のように、ウミガメに印をつけておく、という程度のこともあった。大々的に甲羅に文字を書いて放すことは、ウミガメを放す際に毎回行われていたわけではなく、東北沿岸部すべての漁村で行われていたわけでもない。昭和四年（一九二九）の『岩手日報』の記事などから判断すると、同時に二頭捕れた場合や、発起人となる人がいた場合などに、大漁を祈願する儀礼として行われたと思われる。

東北太平洋岸では、ウミガメの祭祀・供養習俗も顕著である。福島県から青森県（下北半島を除く）にかけての地域で、筆者が確認できなかったものも含めて、一五か所にあったことが分かっている。東北太平洋岸に広く分布していることが分かる。ただし、すべての漁村で行われてきたものではなく、死んだウミガメを発見した際に毎回行ってきたものでもない。死んだウミガメを発見した際に祭祀・供養を行うようになった背景としては、ウミガメが特別に大きかった、何度もやってきたウミガメが死んだ、大漁を待っているときに発見された、というような事情があったようである。

東北太平洋岸の祭祀・供養習俗で特徴的なのは、江戸時代の事例が四例も存在したことである。宮城県七ヶ浜町の「亀霊神社」、宮城県石巻市の「霊亀塔」、宮城県気仙沼市の「大亀」埋葬事例、岩手県釜石市の「瘞亀之碑」である。「亀霊神社」については、別に論じたように、記録と伝承が複数残されているという意味で、きわめて珍しい事例である。漁民たちは死んだウミガメを埋葬して塚を作り、宗教者の助言によって祠を作ったというもので

あった。石巻市の事例は、死んだウミガメを埋葬したものではなかった。売ろうとしたウミガメを、僧侶の助言にしたがって放し、母親の供養の意味をこめて石塔を建てたというものであった。気仙沼市の事例は、漁民が漂流していたウミガメを埋葬したものであるが、江戸時代にはすでに朽ち果てていた。釜石市の事例は、寺の境内においていたウミガメの近くにツルがいたために有名になったが、ウミガメが死んだために埋葬して石碑を建てたというものであった。

この四例を比較すると、経緯はさまざまであるが、江戸時代後期には、東北太平洋岸において、ウミガメを祭祀・供養するという習俗が広まっていたことが分かる。さらに、七ヶ浜町と気仙沼市の事例からは、漁民たちの素朴な心意として、死んだウミガメを埋葬して塚を作るということがあったことがうかがえる。いずれの事例も、たまたま記録として残されたが、記録されていないウミガメの塚は東北地方にも無数に存在したと考えられる。そして、七ヶ浜町、石巻市、釜石市の事例からは、宗教者がウミガメを祀ることを助言したことで、ウミガメを祭祀・供養が始まることもあったということが分かる。

ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げる習俗も江戸時代から確認できる。八戸市の事例は一八世紀と考えられ、七ヶ浜町の事例も江戸時代後期のものと思われる。東北太平洋岸一帯に広く分布しているものの、どこでも確認できる習俗ではない。普代村のように、カメの甲羅干しという言葉だけ伝承されていて、流木を拾うことがなかった地域もある。

ウミガメの剝製を作り、神社に奉納したり、漁民の家で飾るということもあった。ただし、この習俗は東北太平洋岸で広く確認できるものではなく、限定的なものであったようである。

2　全国的な位置づけ

ウミガメの産卵や回遊が多い西南日本では、ウミガメに対する民俗知識も豊富である。ウミガメに対する種類や生態的な特徴に関する知識もみられる。しかし、ウミガメとの接触機会が限られる東北地方では、ウミガメに関する民俗知識も限定的となっている。

ウミガメを利用する習俗は、時代とともに減少してきたが、昭和時代には南西諸島から九州南部、四国南部、紀伊半島南部、伊豆諸島に分布していた。東北地方では、縄文時代でも広く利用されていたわけではなさそうである。それは、縄文時代においても、ウミガメが多い地域ではなかったからであると思われる。

浦島伝説は、各地に伝承されているなかで、福島県いわき市が北限であるといわれる。たとえば、香川県三豊市、京都府京丹後市網野町、愛知県武豊町、神奈川県横浜市などにも伝承されているが、いずれも周辺地域でウミガメの産卵はあるものの、産卵頭数は限られているという地域である。いわき市もアカウミガメ産卵地の北限に近いところであり、産卵頭数は少ない地域である。このようなことも浦島伝説が伝承されることに影響を与えていることが考えられる。

放流習俗については、東北以外でも広く分布している習俗である。鹿児島県奄美地方から東北地方にかけて全国的に分布している。ウミガメに関するほかの習俗はなくても、この習俗だけはあるという地域も多い。ただし、東北太平洋岸の特徴としては、酒を飲ませるだけでなく、声を掛けて放したり、甲羅に文字を書いて放す場合も顕著であるという点にある。これらの習俗はほかの地方でも行われているが、東北では昭和四年の『岩手日報』の事例のように、大がかりな儀礼として行われているものがみられるのが特徴的である。

祭祀・供養習俗も鹿児島県から青森県にかけて広く分布している。とくに山口県萩地方、香川県、愛知県知多半島、静岡県御前崎市周辺、千葉県銚子市などでは集中的に分布するという傾向がある。同じ東北地方でも、日本海

側には祭祀・供養習俗は少ないため、太平洋岸には多いく分布しているといえる。ただし、全国的に見た場合には、東北地方の広大な海岸線の一五か所に点在するだけであるため、知多半島、御前崎、銚子などのように、特定の地域に集中的に分布する傾向とは異なっているといえる。

また、全国的な比較をすると、東北太平洋岸の祭祀・供養習俗の特徴として、ウミガメを「神」として祀る傾向が強いように思われる。それは、「亀神社」などという文字が刻まれたものが多く、「供養」と刻まれたものは一例であることからうかがえる。いわき市の「亀大神」、南相馬市の「亀明神」、七ヶ浜町の「亀霊神社」、南三陸町の「大漁亀神社」、「丸亀神社」、宮古市の「亀神社」、岩泉町の「海亀神社」、久慈市の「丸亀神社」などである。名称や墓標に刻まれる文字は各地でさまざまであるが、愛知県知多半島では「摩訶龍亀大菩薩」、静岡県御前崎市では「亀塚」、千葉県銚子市では「亀之霊」などというものが多い。このことは、川島氏もすでに指摘しているところである。ウミガメを神に祀る背景として、川島氏は宗教的な職能者の影響を想定している〔川島　二〇〇四〕。川島氏は「避けることのできない不幸な遭遇を逆手にとって、「神」に祀り、供養をすることで「大漁」や「海上安全」を直接的に願う方法は、この地方で特に顕著であったように思われる」としている〔川島　二〇〇四〕。

ウミガメがまとわりつく流木を拾い上げる習俗も全国的に広く分布している。鹿児島県屋久島から青森県にかけて確認されている。放流習俗や祭祀・供養習俗ほど事例は多くないものの、各地に点在している。八戸市の事例は、全国的にみて、最も古い事例になる。

ウミガメの剥製を奉納したり、飾る習俗についても各地でみられる。沖縄では新築祝いにウミガメの剥製を贈る習俗があった。近いところでは、東北地方日本海側や下北半島ではウミガメの剥製を祀ったり飾ったりする習俗が顕著である。これらの習俗と似ているものの、太平洋岸では一部の地域で見られるだけのようである。

東北太平洋岸のウミガメに関する習俗を全国的に比較すると、利用的な側面は限定的であり、信仰的な側面が強

いことが分かる。筆者は、日本列島のウミガメの民俗を広域的に見た場合、利用心意優勢型、心意葛藤型、信仰心意優勢型に分類したことがある〔藤井　二〇一二a〕。海村・離島調査の追跡調査のおりには、岩手県普代村を信仰型、東京都八丈島を利用型、高知県宿毛市沖の島・鵜来島を信仰・利用併存型としていたが〔藤井　二〇〇一〕、その後、さらに調査を続けた結果、利用心意優勢型、心意葛藤型、信仰心意優勢型という類型を設定した。こうした類型にしたがえば、東北太平洋岸の民俗は、典型的な信仰心意優勢型に位置づけることができる。次に、東北太平洋岸において、ウミガメに対する信仰心意が顕著になっている背景を検討しておく。

3　信仰的心意定着の背景

a　ウミガメの生態との関連

東北地方では福島県、宮城県でごくわずかにアカウミガメが産卵するのみである。したがって、産卵に関する民俗知識がほとんどみられないことになる。一方で、ウミガメが夏場に回遊してくることは多くの漁民が知っている。確認される放流の事例も八月ごろである。祭祀・供養習俗の時期も、四月から九月ごろで、夏場に多くなっている。この地方の漁民は、夏に回遊するウミガメに漁場や海岸で出会い、生きていれば酒を飲ませたり、甲羅に文字を書いて放し、死んでいれば埋葬して祭祀・供養してきた。

ウミガメとの接触が少ないから食用などに利用する機会も限定的になる。南西諸島など、ウミガメに接触する機会が多い地方では、食用などに利用することも多くなる。接触する機会が少ないために、ウミガメを神様扱いしたり、縁起物として大漁を願うことになる。しかし、東北地方のウミガメの民俗を、すべてウミガメの生態との関連で説明することは危険である。

b　妙見信仰との関連

福島県相馬地方は妙見信仰が盛んである。福島県のウミガメ信仰については、この妙見信仰と結びつけて考えることもできる。和田文夫氏は、相馬地方ではカメは妙見様の使いとして殺してはならないといわれている、と報告している〔和田　一九七八〕。妙見菩薩は、カメの背に乗る姿のものが多いため、カメは妙見の使いといわれているのであろう。相馬地方の豪族であった相馬氏は妙見信仰が厚かった。このため、南相馬市では淡水産のカメを丁重に扱う習俗が存在する。南相馬市博物館の稲葉修氏は、福島県では南相馬市にかぎってニホンイシガメが生息することの背景について、妙見信仰が背景にあるという〔原町市教育委員会文化財課市史編纂室　二〇〇五〕。甲羅に穴があいているイシガメもいるといい、どこかで飼育されていたカメが持ち込まれた「国内外来種」の可能性が高いという。稲葉氏によると、淡水のカメは産卵のときに田んぼの畦に上がってくる。南相馬市の人々は、カメを見つけると、「妙見様のお使いだから」と、農作業を中断して、太田神社の池へ持って行ったという（写真69）。クサガメもいるが、圧倒的に多いのはイシガメであるという。このような、妙見信仰を背景にしたカメ信仰が、沿岸部の漁民のウミガメ信仰にも影響を与えていることは十分予想される。しかし、南相馬市に限らず、東北太平洋岸一帯に広がっているウミガメの放流、祭祀・供養習俗に対する説明にはならない。

▲写真69　相馬太田神社の池（2012年11月撮影）

c　宗教者の影響

祭祀・供養習俗については、複数の事例で宗教者の影響が見受けられる。江戸時代の事例では、宮城県七ケ浜町の「亀霊神社」、石巻市の「霊亀塔」、岩手県釜石市の「瘞亀之碑」で宗教者の助言によって、祠や石塔が建立されていた。福島県いわき市の事例（事例1）、宮城県南三陸町の事例（事例7）も宗教者の助言によって祀られたものであった。気仙沼市でウミガメの絵馬を奉納した事例も宗教者の助言があったようである。このように、東北太平洋岸において祭祀・供養習俗が定着した背景には、宗教者の関与があったことは明らかである。これについては、川島氏もすでに指摘していた。ただし、宗教者が関与した事例はほかの地方でもみられ、東北地方のみの特徴ではない。

宗教者がウミガメ祭祀・供養習俗に関与した特徴的な例として、愛知県知多半島や山口県長門地方があげられる。知多半島では、明治時代末期に漂着したウミガメを祀ったオカメサンの霊験が広まったことが、知多半島にウミガメを祭祀・供養する習俗が広まった一つの背景になっていた。そのうえで、知多四国巡礼によって、オカメサン信仰が広まっていったという特徴がある〔藤井　二〇〇五〕。また、山口県萩地方では、一人の「モノを見る人」（体調が悪いとき、失くし物をしたとき、人を探しているとき、などに相談に行った女性）によって、祭祀・供養習俗が広まったことがあった〔藤井　二〇一二b〕。しかし、東北太平洋岸では、特定の宗教者の影響によるウミガメの祭祀・供養は限定的であり、広い範囲に影響を与えたという痕跡は認められない。東北の広い海岸線に点在するウミガメの祠や墓は、ゆるやかには相互に影響を与えている可能性はあるものの、福島県相馬地方、宮城県の南三陸町付近、岩手県の宮古市付近など、一定の地域を越えて影響を与えあうことは少なかったように思われる。むしろ、個別の事情で祀られたものが多いように思われる。

また、知多半島や銚子では、周辺に利用する人々がいたため、利用習俗との葛藤があり、ウミガメの祟りを恐れ

る、という言説が生み出されていた。そうしたことを背景に、ウミガメの祭祀・供養習俗が爆発的に普及したということがあった。東北の場合は、周辺や内部で利用習俗がきわめてまれであったため、祟りという言説が強化されず、そのために祭祀・供養習俗も集中的な分布をしないという特徴があると思われる。

d　各地との交流と伝播

祭祀・供養習俗については、個別の事情で成立したものが多かったのではないかと述べたが、船乗りや漁民などが各地と交流するなかで影響を与えあった習俗も存在する。

まずは、船乗りの影響を見ておく。江戸時代、東北太平洋岸にも廻船が行き来していた。八戸市で流木を拾い上げたのは廻船の船頭であった。「蕪島之記」によると、彼は八戸から大阪まで行っていたようであり、航海の途中でウミガメが持っている流木を拾い上げたという。これまで筆者は、現存しないものも含めると、江戸時代に拾われたカメの流木を四例ほど確認しているが、寺院を開創した宝暦七年（一七五七）よりも少し前とすると、八戸の事例は最も古いものということになる。津軽深浦（青森県深浦町）では、明和五年（一七六八）にカメが加えていた霊木を受け取るという話があるため、相互に影響を与えていることも考えられる。

このほか、カメの流木は江戸時代には、廻船関係者が拾うことが確認されている。香川県高松市庵治町や愛知県美浜町の野間には、廻船が江戸時代に拾い上げた流木が今も残されている。このうち、香川県に残される流木は、「奥州南部之船福吉丸五百石積船頭伊三郎阿治浦住人」が兵庫県北部の但馬沖で慶応三年（一八六七）に拾ったものであった。一〇〇年以上前のことになるが、同じ、南部の廻船にカメの流木の話が伝承されていたことになる。知多半島の野間船も拾い上げていることなどから考えて、廻船仲間の間では有名な話となっていた。八戸の事例が最古であると断定はできないが、東北で有名になった話が廻船によって各地に広まっていったことは確実であろ

う。

さらに、ウミガメの祭祀・供養習俗にも、廻船の影響が認められる。東北太平洋岸のウミガメの供養塔や祠では、「亀神社」という名称が多いことは先述した。しかし、全国的に見た場合、ウミガメの供養塔や祠などに「亀神社」と刻まれている事例は決して多くはない。全国的にみると、「亀神社」と称するものは、香川県や山口県に見られる。山口県萩地方では、特定の宗教者が助言してウミガメを神として祀るようになったことが明らかになったため〔藤井　二〇一二b〕、個別の地域性があることも事実である。しかし、香川県は北前船の船頭を多く排出した地域であり、山口県萩地方は北前船が通過した地域である。「亀神社」が存在する宮古市鍬ヶ崎地区も廻船の停泊地であった。明確な証拠は存在しないが、「亀神社」の分布からは、廻船による習俗の伝播を想定することができる。

このほか、漁民の移住・交流によってもたらされた習俗もあると思われる。東北太平洋岸は、暖流と寒流の交わる、日本でも有数の漁場である。江戸時代から、紀州などの漁民が東北太平洋岸に来るようになっていた。漁撈技術をはじめとして、さまざまな漁撈習俗が紀伊半島などから東北に伝えられた。ウミガメに関する習俗も全国各地から伝播してきたことが予想されるが、たとえば紀伊半島で盛んであった食用の習俗は広まらなかった。

早くから東北に伝わった漁撈習俗としてカツオ漁がある。紀州南部の漁民は、春先にカツオの群れを探しているときに産卵のために沿岸部にやってくるアカウミガメを見つけることが多かった。このときに、アカウミガメを銛で突き捕り、大漁を願って食してきた。食用にする習俗も、紀州漁民などの模倣とも考えられる。昭和時代でも、東北の漁民は和歌山県方面の漁民がウミガメを好んで食べる、ということは知っていた。しかし、食用習俗は広まらず、大漁を願ってウミガメを放流するという習俗が広まっていた。

実は、漁民の交流のなかで伝え、伝えられたウミガメの習俗は明確には分らない。ただし、流木の習俗は、廻船

以外だけでなく、漁民の交流のなかでも伝播したと考えられる。これは、静岡県御前崎市、千葉県銚子市などのカツオ漁が盛んな地域と比較するとみえてくる。これらの地域では、カツオの大漁を願って、ウミガメが持っている流木を拾い上げて祀るのである。御前崎や銚子でもかつてはウミガメを捕獲していたようであるが、ウミガメは捕獲するものではないとする考えが広まるとともに、カメを捕獲する代わりにカメが持っている流木を拾い上げる習俗が定着したと思われる。普代村に伝承されるカメの甲羅干しという言い伝えも、カツオ漁との関連が考えられる。ただし、東北ではウミガメ自体が遠州灘や房総半島よりも少ないため、ウミガメの流木を拾い上げる機会は限られる。したがって、流木を拾う習俗も御前崎や銚子のように集中的には分布しない。このように、同じ習俗が何度も、別のルートで伝え、伝えられるということが考えられる。

e　東北太平洋岸における生業とウミガメの関連

全国各地との交流のなかで、伝えたり、伝えられたりする習俗もあったが、交流のなかで知っていても定着しなかった習俗もあった。何を受け入れて、何を受け入れなかったか、という背景を考えるには、東北太平洋岸の漁民にとって、ウミガメがどのような存在であったのかを考えておく必要がある。

このことを考えるにあたって、宮古市赤前出身で大謀網の網元をしていた堀内良司氏の語りが参考になる。三陸に回遊するウミガメは暖流のピーク時の八月ごろに来るが、この時期は暖流と寒流の端境期で魚の群れが薄く、大漁を待ちあぐんでいる。そのときに網にカメが入ると吉兆として神様扱いをするのであるという。東北太平洋岸では大謀網と呼ばれる定置網が盛んであった。ここにウミガメが飛び込んでくる時期が、大漁を願っている時期に一致していたというのである。

夏前に行っていたカツオ漁の際にもウミガメに出会う。夏場に黒潮の本流に乗ってウミガメがやってくること

を、東北の漁民たちは知っていた。ウミガメとともにカツオがやってくるという意識があったと思われる。昭和四年八月一四日、岩手県宮古沖でオサガメとアカウミガメを捕まえたのは、カツオ漁の最中であった。カツオとともにやってくるウミガメを、三陸の漁民は大漁の象徴とみてきた。

ただし、ウミガメに対する儀礼を行うかどうかは、船主や船頭、大謀など、漁業の責任者の判断によることが多かった。ウミガメに対して大漁を願うという気持ちはあっても、大謀が指示しなかったので、酒を飲まさずにそのまま逃がしたということもあった。漁業の責任者が信仰熱心であった、知識があった、ということも大きい。また、大きな漁業を行っている場合にも、大規模な儀礼に発展するということもあった。昭和四年八月の『岩手日報』記事の事例はその典型例である。

f　大型海洋生物との比較

ウミガメと同様に魚を連れて来てくれる存在と思われたのがジンベエザメである。東北ではジンベエザメもウミガメと同様、捕獲対象ではなく、魚群を連れてくる大漁の象徴としてみられていた。東北では実際に大漁をさせてくれる存在としてシャチのことも特別視してきた。シャチのことは、以前に考察したことがあるので、その一部を簡単に紹介しておく〔藤井　二〇〇二〕。三陸ではシャチのことをタツ、タカ、タツノカミ、タジノカミなどと呼んでいた。シャチが現れる場所によって、漁獲量に大きな差が出るため、「シャチは神であったり、敵であったりする」、と表現する漁民もいる。大漁をもたらせてくれる漁の神であると同時に、早く去ってもらいたいという気持ちも強かった。漁民たちの生活を脅かす非常に恐ろしい存在でもあった。東北太平洋岸において、ウミガメやジイベエザメはこのような存在とは異なっている。ウミガメは黒潮に乗ってやってくるため、大漁の象徴とされたが、漁獲量を大きく左右することはなく、非常に恐ろしいという存在ではなかった。むしろ、縁起物という位置づ

けとして、願いを海の神に届けてもらうという存在として丁重に扱われた。

一方で、サメやマンボウは東北では捕獲する対象であった。川島氏は、東北のウミガメをマンボウと比較して、興味深い指摘を行っている。西南のウミガメと東北のウミガメが同じような扱いになっているというのである〔川島　二〇〇五〕。つまり、東北ではマンボウは食べるが、ウミガメは食べない。反対に、九州から南西諸島ではウミガメは食べるが、マンボウは食べない。紀伊半島はウミガメ、マンボウともに食べる地域となっている。そして、筆者も述べてきたことであるが、紀伊半島では食用後のウミガメの甲羅を儀礼的に流すが、東北ではマンボウの皮を流す。これは、東北方面の儀礼が西南日本のウミガメ儀礼に影響を与えている可能性がある。さらに、川島氏の報告にあった、ウミガメの口に生米やおにぎりを入れて放す、マンボウの口におにぎりを詰めて流す、という事例は、マンボウの儀礼との共通性を示している。また、ウミガメに真水を飲ませて放すという事例も興味深い。酒を飲ませて放すという習俗が、今のところ、いつ、どこから発生して広まっていったのか分っていないが、東北において、ウミガメに真水を飲ませて放すという事例は、酒を飲ませて放す習俗の背景にあるのではないかとも考えられる。全国の事例と比較しながら、東北地方のウミガメの民俗を考えていくと列島の海の民俗についてまたあらたな側面が明らかになってくると思われる。

他の大型海洋生物と比較することで、東北地方におけるウミガメの特徴がみえてくる。東北地方の漁民にとって、ウミガメは頻繁に出会うわけではないため、サメやマンボウのように食料にすることは少なかった。また、シャチのように漁を実際し大きく左右はしないために、ウミガメに対する怖れの心意は強くはなかった。ウミガメはカツオなどとともに現れたり、ちょうど漁の端境期にやってくることで、大漁を願う縁起物とみられるようになっていたと思われる。

おわりに

以上のように、東北太平洋岸のウミガメの民俗は、利用習俗が少なく、信仰的な側面が多いため、信仰心意優勢型に分類される。各地との交流のなかで、ウミガメに関するさまざまな習俗が入ってきたが、漁業の特徴やウミガメが回遊する時期なども影響して、信仰的な習俗が定着した。宗教者の関与もみられるが、同時多発的に個別に発生した習俗も多いように思われる。東北地方のウミガメの民俗は、ウミガメとの接触が少ないから信仰的なかかわりになるという図式だけで説明はできない。

東日本大震災後の追跡調査では、とくにこれまで確認していた祠や墓がどのようになっているか確認を行った。その結果、津波で流されたものもあったが、津波に襲われながらも残ったものもあった。東北太平洋岸では民俗がどのように継承されていくのか見守っていく必要がある。

震災に関係なく、ウミガメの民俗は薄くなっていると思われる。筆者の調査を通していえば、これは全国的な傾向のようである。東北ではウミガメに酒を飲ませて放す習俗はまだ残っているようであるが、あらたに祠や墓を作ることはほぼなくなっている。最も新しいもので、福島県南相馬市の昭和三九年（一九六四）の事例である。明治から昭和初期に建てられた墓は、その経緯が分らなくなりつつある。平成一一年～一二年（一九九九～二〇〇〇）の調査段階でも建立の経緯が分らないものが多かった。東北では流木を拾い上げることも聞かれなくなっている。古い流木は残っているものもあるが、当主が代替わりをしていくなかで、記憶が薄れていくものもあると思われる。震災を経て、集落が流されたり、多くの人々がなくなったなかで、ウミガメの民俗についても、その記憶が失われてしまったものも多いと思われる。本稿では、大震災前に聞いたことについて、記録として残す意味をこめて、これまでの報告も含めて、丁寧な記述を心がけた。東北沿岸部の民俗の記録を伝え、未来を考える一助になればと願っている。

（注）

（1）海村調査とは、柳田国男主導で、昭和一二年（一九三七）から二年にわたって、全国三五か所の沿海地域で実施された民俗の総合調査のことである。柳田が作成した項目にしたがって、民俗研究者が手分けして調査を行っている。このときの記録は「採集手帖」と呼ばれ、成城大学に保管されている。

（2）小島孝夫氏は筆者が提供した事例も含めて全国のウミガメの墓一覧を作成し、その後、小島氏の一覧表も加えながら田口理恵氏は全国の魚類供養塔の一覧を作成している〔小島　二〇〇五、田口　二〇一一〕。これらにも、筆者や川島氏の報告をもとにして、東北の祠、供養塔が記載されている。

（3）平成一〇年度（一九九八）から一二年度（二〇〇〇）にかけて実施された成城大学民俗学研究所の研究プロジェクト「沿海諸地域の文化変化の研究　―柳田国男主導『海村調査』『離島調査』の追跡調査―」において、筆者は高知県宿毛市、岩手県普代村および三陸沿岸（平成一一年（一九九九）五、八、九月、平成一二年（二〇〇〇）七～八月）、東京都八丈島を調査した。また、平成一六年度（二〇〇四）、一七年度（二〇〇五）にかけて実施した科学研究費補助金若手研究（B）「ウミガメをめぐる食と祭祀についての民俗学的研究」（研究代表者：藤井弘章）では、宮城県七ヶ浜町（平成一七年（二〇〇五）七月）、石巻市（平成一七年（二〇〇五）七月）、青森県下北半島（平成一七年（二〇〇五）九月）を調査した。国学院大学日本文化研究所専任プロジェクト「沿海地域における祭祀と食文化の研究」（研究代表者：藤井弘章）において、宮城県七ヶ浜町を調査した（平成一八年（二〇〇六）七月）。

（4）民俗学研究所の平成二四年度の年間主題調査は東北地方沿岸地域であった。これによって、平成二四年（二〇一二）三月、八月、一一月に青森県八戸市から福島県いわき市の沿岸部を訪ね、ウミガメの民俗について追跡調査した。平成二四年（二〇一二）三月には、宮城県石巻市から岩手県釜石市にかけて、八月には

岩手県釜石市から青森県八戸市にかけて、一一月には宮城県名取市から福島県いわき市にかけて回った。福島県沿岸では、いわき市中之作、南相馬市烏崎で報告されていた〔小島　二〇〇五〕。これらについて、震災前には筆者は調査をしていなかったが、平成二四年（二〇一二）一一月に現状確認の意味もあって現地調査を行った。なお、調査の一部に、近畿大学平成二三年度卒業生の奥村芙美氏、水口小百合氏、山下洋平氏も同行した。

（5）青森県下北半島にもウミガメの祭祀・供養習俗が多数存在しており、筆者も平成一七年（二〇〇五）に現地調査を行っている。ただし、今回は太平洋沿岸に対象地域を絞り、福島県いわき市から青森県八戸市までを取り上げることとする。

（6）ACI Sokendai の貝塚遺跡データベースにより「ウミガメ」のキーワードで検索した結果、東北地方太平洋岸の遺跡でヒットしたものをまとめたのが表2である。

（7）二つの「亀神社」の建立年代については、それぞれの報告において年代が異なっている。沢内氏は明治二〇年八月二一日と昭和四年八月〔沢内　一九五五〕、小島氏の『岩泉の石碑』は明治一八年と昭和八年〔小島　一九七四〕、小島氏の『陸中海岸風土記』と『いしぶみの岩手』は明治二八年八月と昭和四年八月〔小島　一九八四・一九九二〕、宮古市教育委員会は明治二五年八月二一日と昭和四年八月〔宮古市教育委員会　一九八四〕、と報告されている。現在、明治の「亀神社」については確認できないが、宮古市内の石碑を網羅的に調査している『宮古市の石碑』に記載されているとおり〔宮古市教育委員会　一九八四〕、明治時代の「亀神社」については、明治二五年八月二一日としておく。

（参考文献）

秋葉保夫・小山均・高橋修・高橋雄一　二〇〇〇　『宮城県の両生類・は虫類』　宮城野野生動物研究会

阿部和夫　一九九〇　「牡鹿町長渡浜の古鯨碑と霊亀塔について」『石巻地方研究』三

岩手県教育委員会事務局文化課編　一九八二　『岩手県文化財調査報告書　七五　岩手の俗信　五』　岩手県教育委員会

馬目順一　一九六九　「刺突傷痕のあるウミガメ類の側板骨について」『古代文化』二一―一〇

大島郷土誌刊行委員会編　一九八二　『大島誌』　大島郷土誌刊行委員会

牡鹿町誌編さん委員会編　二〇〇二　『牡鹿町誌』下　牡鹿町

鹿島町史編纂委員会編　一九八八　『鹿島町史資料　一　鹿島町の石造遺物』　鹿島町史編纂委員会

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八五　『角川日本地名大辞典　三　岩手県』　角川書店

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九七九　『角川日本地名大辞典　四　宮城県』　角川書店

釜石市教育委員会社会教育課文化財係編　一九八二　『釜石市文化財調査報告書　一三　歴史の道「浜街道」上』　釜石市

釜石市誌編纂委員会　一九六一　『釜石市誌』史料編二　釜石市

亀崎直樹編　二〇一二　『ウミガメの自然誌　産卵と回遊の生物学』　東京大学出版会

唐桑町史編纂委員会編　一九六八　『唐桑町史』　唐桑町

川島秀一　二〇〇三　『漁撈伝承』　法政大学出版局

川島秀一　二〇〇四　「東北太平洋岸のウミガメの民俗」『東北民俗』三八

川島秀一　二〇〇五　『カツオ漁』　法政大学出版局

小島俊一　一九七四　『岩泉の石碑』　私家版
小島俊一　一九八四　『陸中海岸風土記』　熊谷印刷
小島俊一　一九九二　『いしぶみの岩手』　熊谷印刷
小島孝夫　一九九五　「ウミガメに関する漁撈習俗について」千葉県史料研究財団編『千葉県史編さん資料　千葉県地域民俗調査報告書　二』　千葉県
小島孝夫　二〇〇三　「漁業の近代化と漁撈儀礼の変容―千葉県銚子市川口神社ウミガメ埋葬習俗を事例に―」『日本常民文化紀要』二
小島孝夫編　二〇〇五　『海の民俗文化　漁撈習俗の伝播に関する実証的研究』　明石書店
小玉敏　一九八〇　「漁村生活の一考察―松島湾を中心として―」『東北民俗資料集』九
佐々木長生　二〇一一　「浜下りと大震災」『季刊東北学』二九
里見庫男監修　二〇〇七　『決定版　いわきふるさと大百科』　郷土出版社
沢内勇三　一九五五　『鍬浦史話　宮古郷土史年表』　郷土史同好会
七ヶ浜町教育委員会編　一九八八　『漁業点描』　七ヶ浜町教育委員会
七ヶ浜町誌編纂委員会編　一九六七　『七ヶ浜町誌』　七ヶ浜町役場
志津川町誌編さん室編　一九八九　『志津川町誌　Ⅱ　生活の歓』　志津川町
志津川町誌編さん室編　一九九一　『志津川町誌資料集　2』　志津川町
菅原雪枝ほか翻刻　二〇〇一　『仙台領の地誌』　今野印刷
田口理恵・関いずみ・加藤登　二〇一一　「魚類の供養に関する研究」『東海大学海洋研究所研究報告』三二
丹野正　一九五一　「亀のしょい木、亀のしょい石」『民間伝承』一五―一一

東北歴史資料館編　一九八四　『三陸沿岸の漁村と漁業習俗　上』　東北歴史資料館
中道等　一九二五　『津軽旧事談』　郷土研究社
楢崎友子　二〇〇九　「Diving behaviour of loggerhead turtles, *Caretta caretta*, migrating to the northern Pacific coast of Japan（日本の北部太平洋沿岸域に来遊するアカウミガメ（*Caretta caretta*）の潜水行動に関する研究）」（英文、東京大学提出博士論文）
楢崎友子・詫間峻一・林果林・佐藤克文　二〇一一　「三陸沿岸域に来遊するウミガメ類を対象とした調査プロジェクトの現状」『日本ウミガメ誌　2011』日本ウミガメ協議会
野馬追の里原町市立博物館編　二〇〇四　『原町の動物―けもの・カエル・ヘビの仲間―』　野馬追の里原町市立博物館
八戸市史編纂委員会編　二〇〇八　『新編　八戸市史　近世資料編Ⅱ』　八戸市
八戸市博物館編　一九八八　『市内神社仏閣秘宝展』　八戸市博物館
花泉町教育委員会編　一九七一　『貝鳥貝塚調査報告』　花泉町教育委員会
早坂和子　一九八一　「岩手県北漁村の信仰」『東北民俗資料』一〇
原町市教育委員会文化財課市史編纂室編　二〇〇五　『原町市史　八　特別編Ⅰ自然』　原町市
福島県生活環境部環境政策室自然保護グループ編　二〇〇三　『レッドデータブックふくしま　Ⅱ　―福島県の絶滅のおそれのある野生動物―（淡水魚類　両生・爬虫類　哺乳類）』　福島県生活環境部環境政策室自然保護グループ
福島中央テレビ編　一九七六　『ふくしま文庫　二八　ふくしまの伝説』　ＦＣＴサービス出版部
藤井弘章　一九九八　「ウミガメの墓―和歌山県内の事例報告―」『和歌山県立博物館研究紀要』三

藤井弘章　一九九九　「ウミガメと流木にまつわる漁撈習俗」『エコソフィア』四
藤井弘章　二〇〇一　「地域差と時代差からみたウミガメの民俗―海村・離島追跡調査から―」『成城大学民俗学研究所紀要』二五
藤井弘章　二〇〇二　「大型海洋生物の民俗―地域的特徴と時代的変化―」田中宣一・小島孝夫編『海と島のくらし―沿海諸地域の文化変化―』雄山閣
藤井弘章　二〇〇五　「知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗」『名古屋民俗叢書　四　生活環境の変化と民俗』
藤井弘章　二〇〇六　「ウミガメの民俗　5　江戸時代のウミガメ供養1　―宮城県七ヶ浜町「亀霊神社」の成立―」
藤井弘章　二〇一一　「津波と民俗学」『季刊東北学』二八
藤井弘章　二〇一二a　「民俗　ヒトとウミガメの関係史」亀崎直樹編『ウミガメの自然誌』東京大学出版会
藤井弘章　二〇一二b　「山口県のウミガメの民俗―長門地方の祭祀・供養習俗を中心に―」『民俗文化』二四
藤井弘章　二〇一三a　「江戸時代におけるウミガメ祭祀の成立過程　―宮城県七ヶ浜町の伝承と新出資料の比較を通して―」『近畿大学大学院文芸学研究科紀要混沌』一〇
藤井弘章　二〇一三b　「愛知県のウミガメの民俗」『名古屋民俗』五九
普代村教育委員会編　一九八四　『普代の石碑』　普代村
浮木寺編　一九八八　『浮木寺誌』　浮木寺
平凡社地方資料センター編　一九八七　『日本歴史地名大系　四　宮城県の地名』　平凡社
平凡社地方資料センター編　一九九〇　『日本歴史地名大系　三　岩手県の地名』　平凡社
三浦寛平　一九九八　「盛厳寺之碑　六」『寺報盛岩寺』二〇

南相馬市博物館編　二〇〇六　『自然の恵みと祭り　―海と川―』　南相馬市博物館
宮城県史編纂委員会編　一九六〇　『宮城県史　二〇　民俗Ⅱ』　宮城県史刊行会
宮古市教育委員会編　一九八四　『宮古市の石碑』　宮古市教育委員会
宮古市教育委員会編　一九九四　『宮古市史　民俗編　上』　宮古市教育委員会
毛藤勤治編　一九九二　『岩手の俗信』　岩手日報社
柳沢践夫　二〇〇〇　「福島県のウミガメ」『うえいぶ』二三
柳沢践夫　二〇〇一　「いわきの浦島太郎」『うえいぶ』二六
柳田国男編　一九四九　『海村生活の研究』　日本民俗学会
和田文夫　一九七八　『ふくしま漁民の民俗』　福島中央テレビ
渡辺兼雄　一九九四　『角屋敷久助覚牒』　共和印刷企画センター

（付記）

福島県いわき市では、松本茂氏に話をうかがい、吉田生哉氏（いわき市暮らしの伝承郷）、小野佳秀氏（いわき市暮らしの伝承郷）、椰良幸広氏（いわき市暮らしの伝承郷）のお世話になった。浪江町では、倉坪郁美氏（苕野神社宮司）のお世話になった。南相馬市では、二本松文雄氏（南相馬市教育委員会）、稲葉修氏（南相馬市博物館）のお世話になった。

宮城県七ヶ浜町では、加藤実氏、鈴木捨五郎氏、鈴木義信氏に話をうかがい、七ヶ浜町歴史民俗資料館のお世話になった。石巻市では、阿部昭一氏、山本春人氏に話をうかがい、石田正孝氏（牡鹿町誌編纂委員会事務局）、大久保浩氏（金華山黄金山神社）、鼇甲庵のお世話になった。

岩手県釜石市では、佐々木長七氏、佐々木ヒサ氏、佐々木利久氏、花渕洋氏、三宅俊禅氏（盛岩寺）、三浦寛平氏に話をうかがった。宮古市では、石崎賢一氏、佐々木聖氏、中嶋勝正氏、本多由右衛門氏、松野ソノ氏に話をうかがい、岸昌一氏（宮古市史編さん室）、假谷雄一郎氏（宮古市史編さん室）、牧野栄山氏（心公院）のお世話になった。また、宮古市出身の堀内良司氏、堀内イセ氏に話をうかがった。岩泉町では、小本浜漁業協同組合のお世話になった。田野畑村では、久里十太郎氏に話をうかがい、安達尊伸氏（田野畑村教育委員会）にお世話になった。普代村では、大上泰久氏、太田卯之助氏、金名部直徳氏、下上恵一氏、道合政喜氏に話をうかがい、木村耕一氏（普代村教育委員会）、三船雄三氏（普代村総務課）にお世話になった。久慈市では、伊川種蔵氏、広崎国雄氏に話をうかがい、飯田喜久雄氏（久慈市教育委員会）のお世話になった。

青森県八戸市では、中村好伸氏（浮木寺住職）に話をうかがい、柏井容子氏（八戸市博物館）のお世話になった。

このほか、川島秀一氏、佐々木長生氏、亀崎直樹氏（日本ウミガメ協議会）、柳沢践夫氏（アクアマリンふくしま）、楢崎友子氏（東京大学海洋研究所国際沿岸海洋研究センター）、石原孝氏（日本ウミガメ協議会）のお世話になった。お世話になったすべての方々に対して感謝の意を表したい。なお、（　）の中は、調査時のものである。

なお、写真については、注記のない限りはすべて筆者の撮影である。